

令和元年度

高山市近代文学館調査・研究報告書

令和二年三月

一般社団法人 高山市文化協会

序

一般社団法人 高山市文化協会は、高山市から委託を受けて、郷土に係わりのある文学作品を収集・調査して、作者の功績とともに「高山市近代文学館調査・研究報告書」にまとめ、市民の皆様にご紹介しています。

今回は、高山を代表する詩人・歌人の福田夕咲について調査しました。

福田夕咲が早稲田大学時代に仲間と培った文学への情熱が、その後の詩や短歌の創作の源となり、郷里に帰ってから指導や発表する機会を設ける等、飛驒の文学に大きな影響を与えることとなりました。今回の調査では、その業績を振り返り、また中央の文壇で名を馳せた若山牧水、北原白秋、吉植庄亮らとの関わりを調べました。

中でも、牧水の著書『みなかみ紀行』では、長野での短歌会の途中に立ち寄った高山で、夕咲との再会した時の心根がありありと描かれています。牧水を迎える夕咲のもてなしと、夕咲の心境を思いやる牧水との温かいやりとりが、夕咲と中央文壇との結びつきを一層強くし、地元での活動の源になったのではないかと推察します。

令和二年三月

一般社団法人 高山市文化協会

目次

第三十一回近代文学館企画展「福田夕咲と若山牧水」	1
一、福田 夕咲	2
（一）福田夕咲年譜	3
（二）写真	8
（三）短歌・俳句等	12
（四）書籍・寄稿文等	27
（五）その他	32
二、若山 牧水	33
（一）写真	34
（二）短歌・俳句	37
（三）雑誌・書籍	41
三、北原 白秋	42
四、吉植 庄亮	44

付録 第九回 近代文学館企画展「福田夕咲展」展示抜粋	47
一、写真	48
二、掛け軸	49
三、短冊	51
四、扁額	56
五、寄稿・発行・記事	57
六、手紙・その他	70

第三十一回 近代文学館企画展

「福田夕咲と若山牧水」

令和二年二月十五日(土)～十六日(日) 於 高山市民文化会館

一、
福田 夕咲

明治十九年（一八八六）三月十二日（昭和二十三年（一九四八）四月二十六日

詩人・歌人。高山市大新町一の人。吉郎兵衛（敦雄）の四男。本名は有作。斐太中学、早稲田大学文学部卒。

学生時代から人見東明、相馬御風らと交わって「自由詩社」を創設。明治四十二年（一九〇九）読売新聞社に入社して北原白秋、若山牧水らと詩壇の新運動に参加。家庭の事情で大正三年（一九一四）帰郷。瀧井孝作らとの『ツチグモ』の創刊、（大三（一九一四）『飛騨新聞』創刊（昭二三（一九四七）を始め山百合詩社、飛騨山刀俱樂部、飛騨短歌会などを育てて飛騨の文化に大きな足跡を残した。その才能から、飛騨という田舎にこもるのを惜しむ声もあった。昭和十七年（一九四二）高山食品卸市場が設立され常務取締役。

詩集『春の夢』、歌集『山花一束』『山づと』。

【飛騨人物事典】



福田夕咲 肖像

高山市近代文学館蔵

(一) 福田夕咲年譜

一八八七(明治一九)年 三月十二日、岐阜県高山市大新町に生まれる。本名は有作。

一八九一(明治二四)年 五歳 四月、高山尋常高等学校(現・東小学校)に入学。普通より一年早く満五歳で入学。

一八九七(明治三〇)年 一一歳 四月、斐太尋常中学校(現・斐太高等学校)へ入学。

一九〇四(明治三七)年 一八歳 三月、岐阜県立斐太中学校卒業。

四月、早稲田大学高等予科文学部に入学。

一九〇五(明治三八)年 一九歳

七月、早稲田大学高等予科を卒業。
九月、早稲田大学大学部英文学科に入学。

一九〇七(明治四〇)年 二一歳

一月一日、読売新聞の新体詩の募集に応募した「新春」が一位に入選し掲載された。
六月、『文庫』六月号に「幻」「紅き灯青き灯」「まろき石」を処女作として発表し、その後も継続して同誌に詩を発表。
十月、『文庫』同人による詩文研究会「黒潮会」を結成。

一九〇八(明治四一)年 二二歳

二月、前年結成された「早稲田詩社」に参加。
三月、『早稲田文学』に「疑惑」を発表。

五月、人見東明・加藤介春・三富朽葉・今井白楊とともに自由詩社を結成。機関紙『自然と印象』を創刊する。創刊号に「月光と少女」を総題とする「灰白」「ツワイライト」など六編を掲載。

七月、早稲田大学大学部英文学科を卒業。読売新聞社に入社。

一九一〇(明治四三)年 二四歳

二月、詩二編「春の午後」「女学院の黄昏」を『自然と印象』第九集に発表。
四月、岩野泡明・藤原有明・小山内薫らによる『世界文芸』が創刊され、編集に関わる。第一号に「春」「恋」を発表。
十月、清浦青鳥(人見東明)・楠山正雄・秋田雨雀らとともに『劇と詩』を創刊。在京時代の主な活躍の場となる。

一九二一（明治四五）年 二六歳

一月一日、処女詩集『春のゆめ』を出版。
三月、「劇と詩の会」を設立。雑司ヶ谷で第一回の会合を開く。

一九二三（大正二）年 二七歳

六月、和綴の趣味本『蝙蝠』を兄・東作（号・ひだ丸）と発刊。
七月、島村抱月を代表とする芸術座の評議員となる。読売新聞社を退社し、創刊された『憲政新聞』を文芸主任として入社。文芸欄と一面の編集を担当した。

九月、『劇と詩』は新生面の開拓を目指して『創造』と改題した。

十二月、憲政新聞社を退社。この頃、しばしば病氣にかかり心身ともに弱っていた。

一九二四（大正三）年 二八歳

三月、郷土誌『ツチグモ』を兄・鋤雲とともに高山で創刊。郷土における文学活動の第一歩となる。瀧井孝作が大阪・東京で編集。

四月、『憲政新聞』に小説『女三昧』を連載し始めたが、高山へ帰るため二十回で打ち切りとなる。

五月、兄・吉郎兵衛耕作の後継者として高山へ帰る。

一九二五（大正四）年 二九歳

九月、『高山タイムス』にコラム「山房日記抄」を書く。以後、時評「乱筆御免」他、エッセーと評論を掲載。

一九二六（大正五）年 三〇歳

一月、飛騨で最初の日刊紙『飛騨日報』の短歌欄の選者となる。

一九二八（大正七）年 三二歳

五月、詩歌集『クラジン』を鋤雲とともに創刊。

八月、飛騨短歌会の前身となる「山百合詩社」を、山田白馬・黒内桃月らとともに結成。歌誌『やまゆり』を創刊。夕咲の本格的な短歌活動が始まる。

一九二九（大正八）年 三三歳

考古学や土俗学に関心を抱き、近郊の発掘調査に参加し「石器いじり」一〇三を郷土誌『飛騨史壇』に発表した。

一九三〇（大正九）年 三四歳

一月、血縁の人々の親睦会「ハートクラブ」を結成。
二月、山岳文化の提唱を目的として「飛騨山刀俱樂部」を結成し、位山雪中登山を行った。
四月、山刀俱樂部機関紙『山郷新誌』を創刊した。
アルプス野球団の歌「斐太アルプス野球団歌」作詞。

- 一九二一（大正一〇）年 三五歳 九月、早稲田大学の学友、若山牧水が突然来訪し、夕咲を喜ばせる。
- 一九二三（大正一二）年 三七歳 三月、『池之端惣助翁伝』を執筆。
- 一九二四（大正二三）年 三八歳 二月、山百合詩社の同人誌『静かなる饗宴』を創刊。
- 一九二五（大正二四）年 三九歳 二月、『午後の庭園』『女学院あとのたそがれ』が『明治大正詩選』（新潮社）に収録される。（『午後の庭園』は、後に中田喜直）により混成四部合唱曲作曲され、音楽の友社刊『世界音楽全集』声楽篇第二十九巻日本合唱曲集に収録された）十一月、『晩酌醉唱』『夜霧』が北原白秋・三木露風らの編集による『現代日本詩選』（アルス）に収録される。
- 一九二六（大正二五）年 四〇歳 四月、『画家と詩人』が創刊され同人となる。
六月、富田令禾・上島禅逸・代情イハホらと文芸同人誌『朱筆』を創刊。
- 一九二七（昭和二）年 四一歳 二月、『岳に焦りつく』『今宵忍ぶなら』『空は雪雲』の三篇が『日本民謡作歌集』に収録される。
このころ民謡詩を多く創作するようになる。
- 一九二八（昭和三）年 四二歳 八月、『清教徒の愁ひ』が『増補近代名詩選』（資文堂書店）に収録される。
- 一九二九（昭和四）年 四三歳 二月、山田白馬らとともに総合文芸誌『悲陀』を創刊。
四月、詩「画僧 白雲居」「老娼婦おとく」など四編が『現代日本文学全集 37』（改造社）に収録される。
- 一九三〇（昭和五）年 四四歳 四月、吉村比呂詩・橋本培石らと茨の花詩社を結成し、月刊誌『茨の花』を創刊。
八月、鎌手白映・西垣静芳らと裸形詩社を結成し、翌年五月、歌誌『裸形』を創刊。
- 一九三二（昭和七）年 四六歳 十月、早稲田大学の学友、北原白秋が来訪し旧交を温める。
- 一九三三（昭和八）年 四七歳 十一月、吉村比呂詩・山下笛朗らと一刀三礼社を結成し、歌誌『鉈削仏』を創刊。
- 一九三四（昭和九）年 四八歳 十月、高山本線開通記念の放送番組（日本放送協会名古屋放送局）に出演し、「高山へ汽車がつく」と題して語った。

一九三五（昭和一〇）年 四九歳

一月、飛騨考古土俗学会誌『ひだびと』に「山都年中行事」を一年間にわたり連載した。
四月、名古屋放送局から、高山本線全通記念の放送番組「神秘境飛騨を語る」の内「高山祭について」を語った。
十一月、誕生五十周年記念音楽会が国技館で開かれた。

一九三六（昭和一一）年 五〇歳

八月、『山都年中行事』を飛騨考古土俗学会より出版。
十月、高山町と大名田町が合併し高山市が誕生。それを記念して「大高山行進曲」を作詞した。作曲は山下笛朗。
「飛騨の古民謡について」が白鳥省吾編『諸国民謡精査』に収録。

一九三九（昭和一四）年 五三歳

五月、「献穀田御田植式歌」を作詞。山下笛朗作曲により吉城郡国府宇津江小学校の児童が歌った。

一九四一（昭和一六）年 五五歳

二月、高山市の委嘱を受けて、「飾りものの話」をまとめ刊行。

一九四二（昭和一七）年 五六歳

第一歌集「山花一束」を出版。

一九四三（昭和一八）年 五七歳

五月、第二歌集「山づと」を出版。

一九四六（昭和二一）年 六〇歳

一月、富田令禾・大埜間霽江・鎌手白映らと飛騨短歌会を結成し、歌誌『飛騨短歌』を創刊した。
二月、白川正中（純児）・山下笛朗らと道連吟社を結成し、機関紙『椎の葉』を創刊した。
十一月、「憲法公布記念祝ぎ歌」を作詞した。

一九四七（昭和二二）年 六一歳

四月、『飛騨新聞』創刊にあたり主筆となり、時事評論を担当。
九月、総合誌『新飛騨』に詩「新飛騨百景」を、連歌形式で発表した。「タカヤマ・ステーション」「東山の黎明」「ぶんねもん坂」「高山郵便局」「中橋懐古」「十六バンク」「渋草陶場」「公民館のひと夜」が最後の詩稿となった。

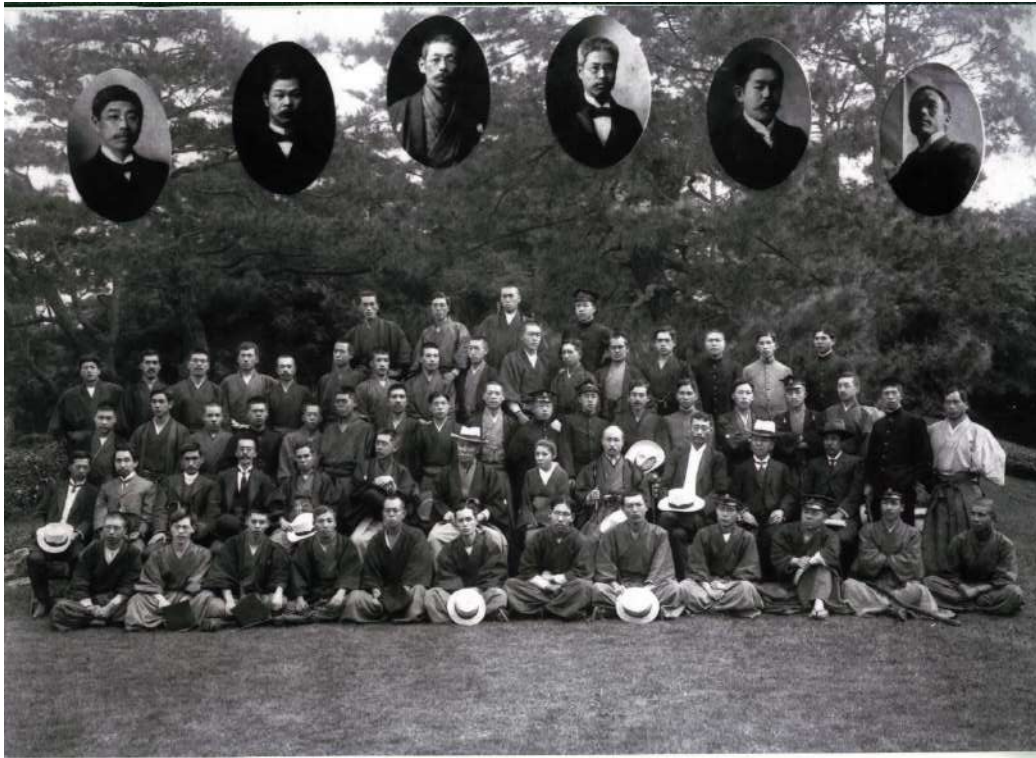
一九四八（昭和二三）年 六二歳

二月、名古屋放送局から「飛騨の文化」と題して語る。
三月、名古屋放送局から「岐阜県人を語る」を放送。
四月二十六日、胃潰瘍のため午後十一時三十分死去。
法名、寂々院夕咲。

一九四九（昭和二四）年	十月、城山月見平に飛騨短歌会が歌碑設立。「み佛の思惟の姿に似たらすや静けきかもよ丘の夕はえ」
一九六九（昭和四四）年	三月、福田夕咲全集刊行（福田夕咲全集刊行会）

(二) 写真

① 早稲田大学時代



福田夕咲 早稲田大学の卒業写真

高山市近代文学館蔵

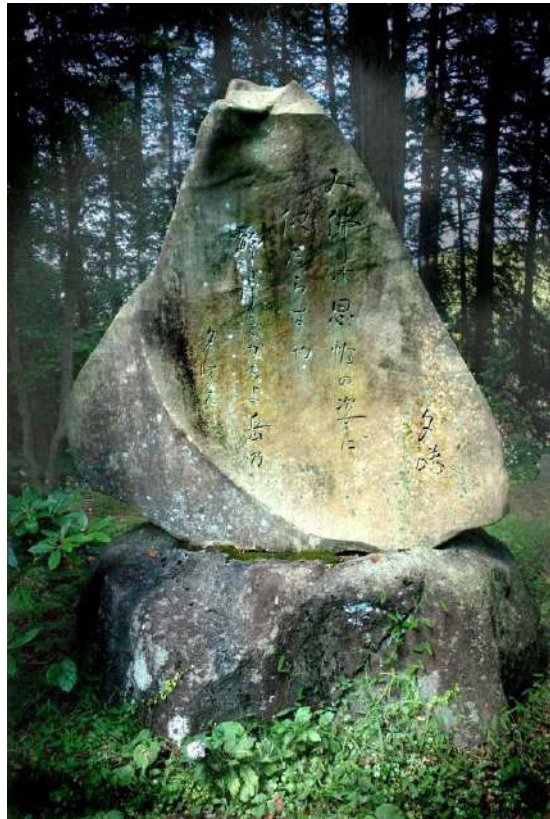


福田夕咲 早稲田大学学舎

高山市近代文学館蔵

② 福田夕咲歌碑

城山・月見平の歌碑



福田夕咲 歌碑

み佛の思惟の姿に

似たらすや

静けきかもよ岳乃

夕はえ

夕咲

城山月見平



福田夕咲歌碑 完成記念写真

昭和二十三年（一九四八）四月六十三歳で没すると、飛騨短歌会は建碑にとりかかり、十一月には完成した

飛驒の里・文学散歩道の歌碑



福田夕咲 歌碑

いわのなる 夕咲

沼の水乃面に

白くもの

うつろう

みれば

そぞろさびしき

飛驒の里 文学散歩道

昭和二十九年（一九五四）四月、飛驒短歌会と飛驒ニュース社が、市内上野町にあった「鹿の湯」前庭の通路にこの福田夕咲の歌碑を建てた。その後「鹿の湯」は廃業し、建物を取り壊して宅地に造成するため、夕咲の歌碑は撤去されていたが、上野町横山実氏のご協力を得て、平成二十三年（二〇一）八月十日、短歌会「萌木会」から移設費用の一部の寄付を得て、社団法人高山市文化協会が、西之一色町の文学散歩道から上野の丘陵が望める、この場所に移設し、高山市へ寄贈した。

③ その他の写真



はあとくらぶ親睦会

昭和四年（一九二九）

後列左より岡村利平・山下笛朗・夕咲・松山吟風
松山家の座敷
近代文学館蔵

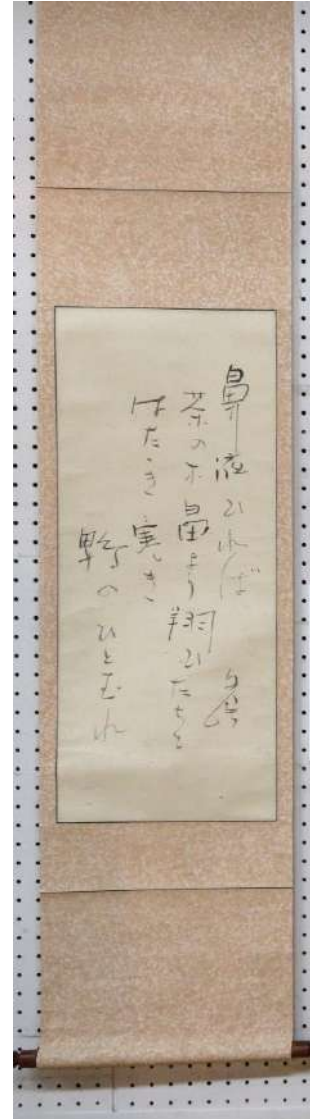
送別会の記念写真



個人蔵

(三) 短歌・俳句等

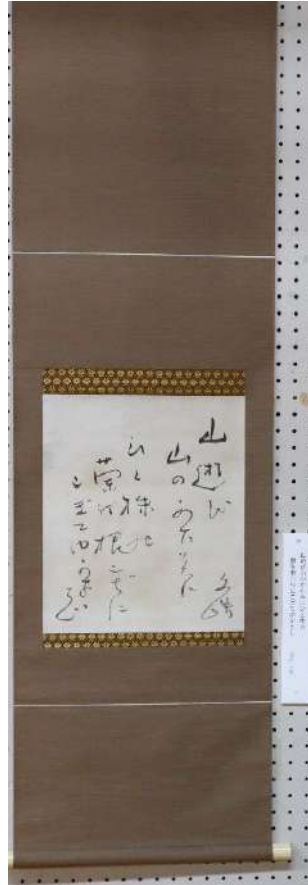
① 掛け軸・額



鼻液ひれば茶の木畠より翔ひたちて

はたつき寒き鶉のひとむれ

個人蔵



山遊び山のかたみにひと株の

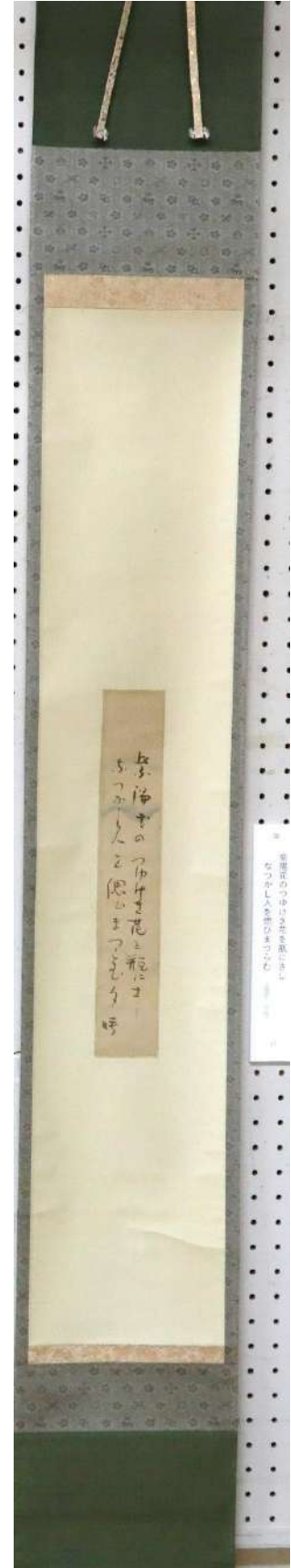
蘭を根こちにこぎてゆかまし

個人蔵



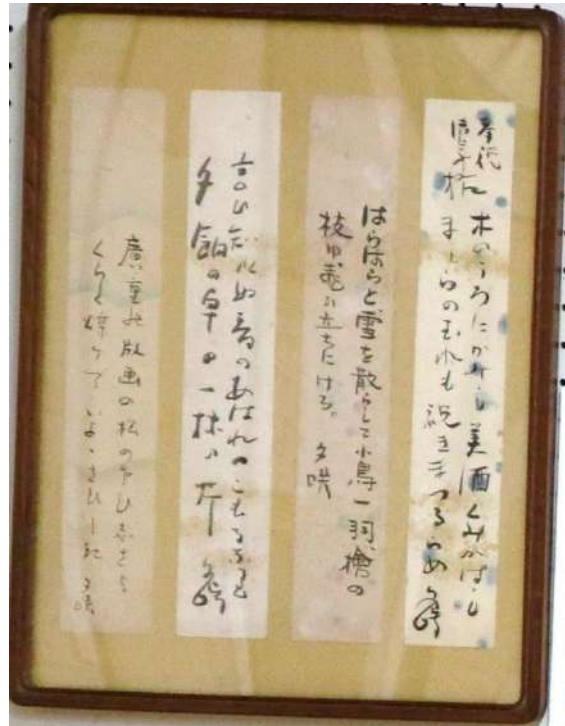
七草の数に入らねとひる顔の
うす紅色の花の愛しさ

個人蔵



紫陽花のつゆけき花を瓶にさし
なつかし人を偲ひまつらむ

個人蔵



奉祝 木のうろにかみし美酒くみかはし

御昇格 ましらのむれも祝きまつらめ

はらはらと雪を散らして小鳥一羽檜の

枝ゆ飛び立ちにける

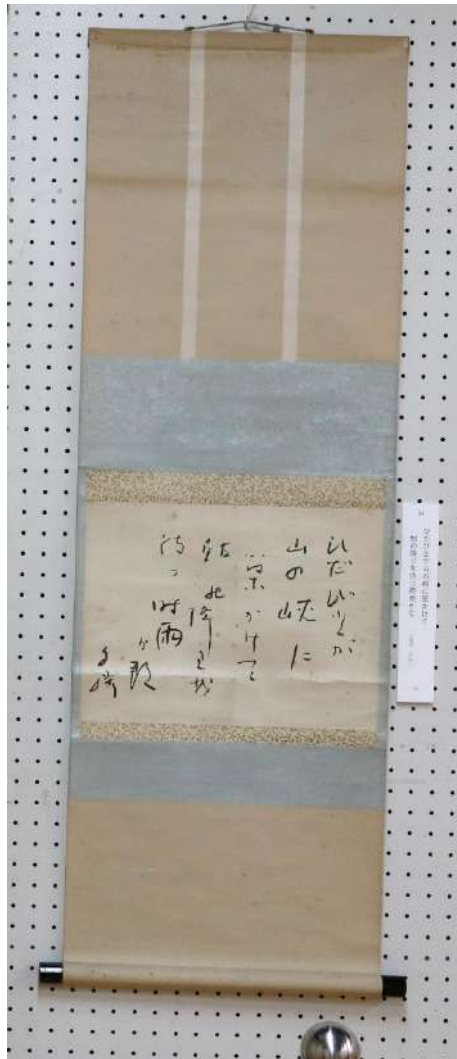
言い知れぬ春のあはれのこもるなり

夕餉の卓の一抹の芹

広重の版画の松のさひ志さよ

くらく煤けていよゝさひし起

個人蔵

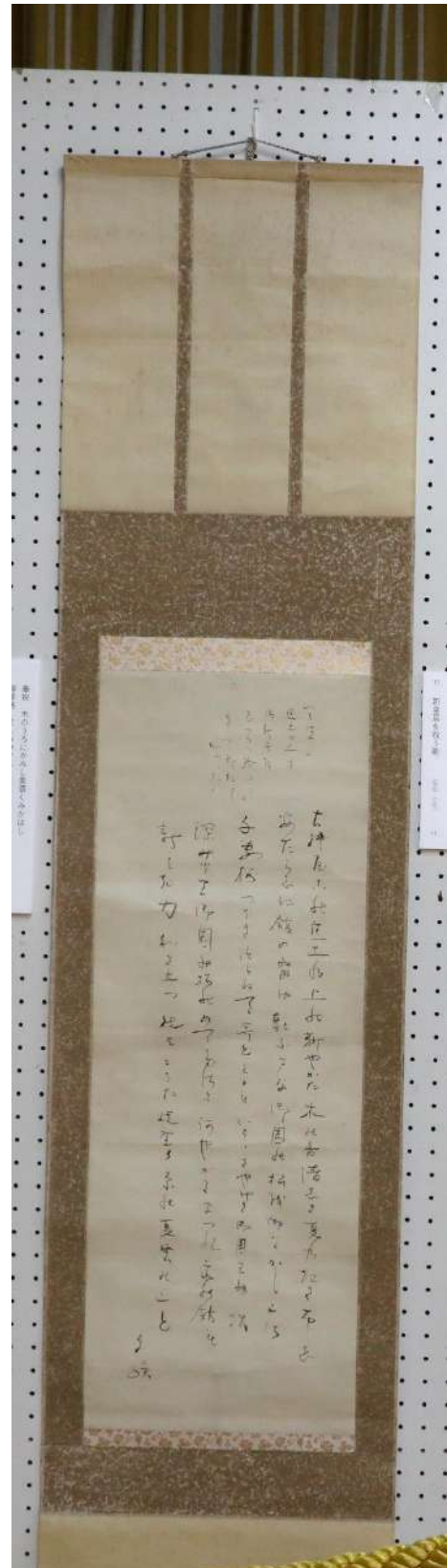


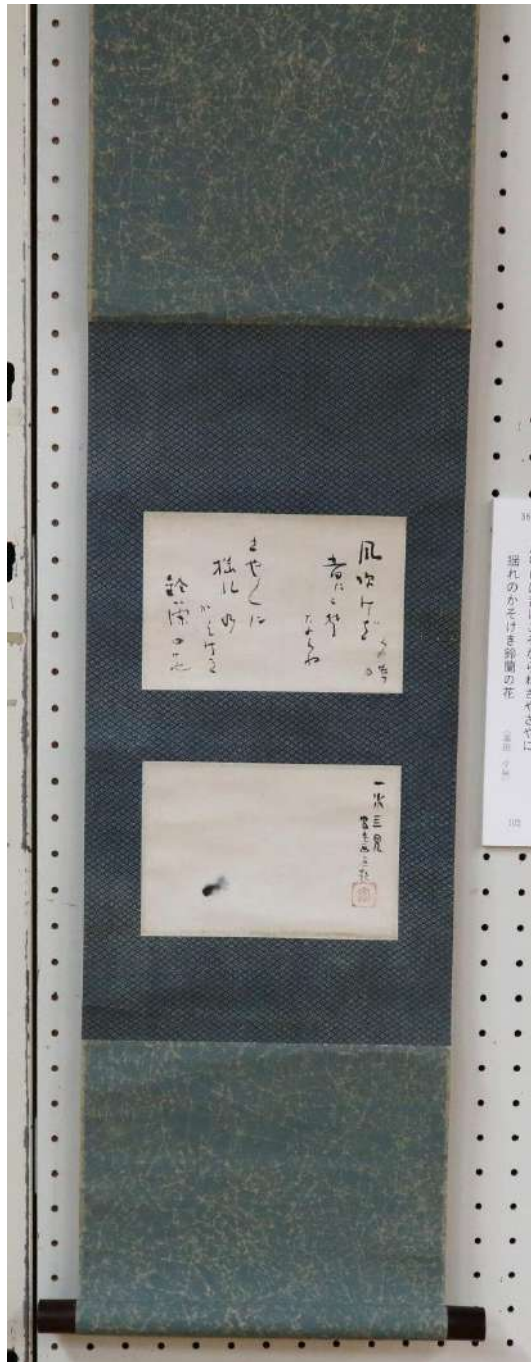
ひだびとが
山の峽に
築かけて
鮎の降りを
待つ時雨
かな

個人蔵

新皇居を祝う歌

個人蔵





風吹けば
音にこそ
ならね
さやくに
揺れの
かそけき
鈴蘭の花

近代文学館蔵



嶽は
しら雪
花よめ
すがた
里は
もみぢのいろかさね

近代文学館蔵

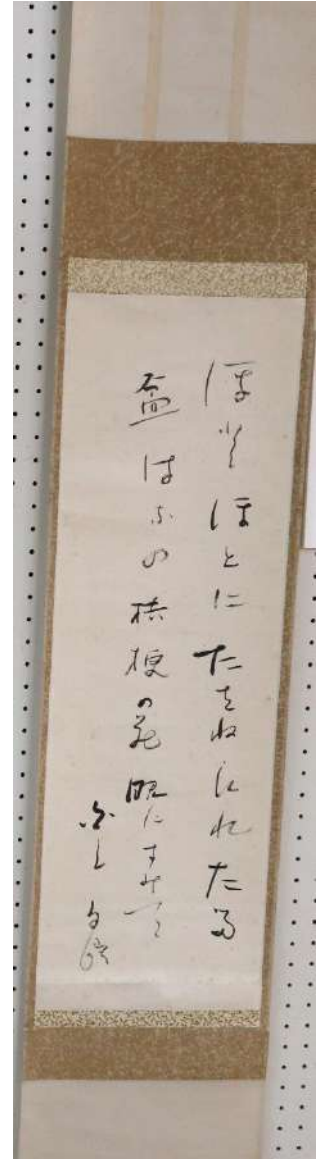


竹林清酌 夕咲

竹林に雀はたゝき遠空はほのかに
阿かく夕焼けて吹く風寒し お
もほへや古きむかしの もろ
こしの七賢人も 今日いまし 吾
かあることく 思ふとちゐ寄り津
とひて 世を遠く酒くましけむ
呉竹のそのひとふしのうつし世と
法師はのれとけふの日の
このひと時は けにたぬし さ
らに酌まゝし 西山に入る日を
惜しみ 雀ともはたゝくものを
惜しめともやがてくれゆく あ
はれ今日の日

反歌

もろこしの七賢人も竹林に
入る日を惜しみ酒くましけむ

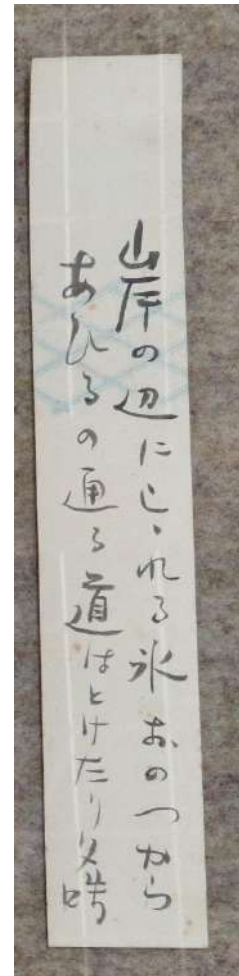


ほとほとにたねいれたる盆はなの

桔梗の花眼にすみて白し

近代文学館蔵

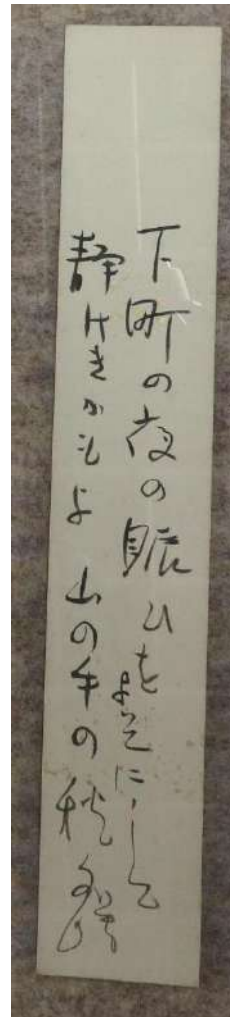
② 短冊



岸の辺にこゝれる水おのつから

あひるの通る道はとけたり

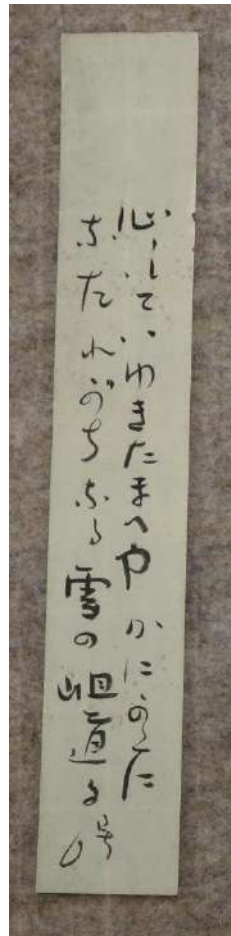
個人蔵



下所の夜の賑ひをよそにして

静けきかもよ山の手の秋

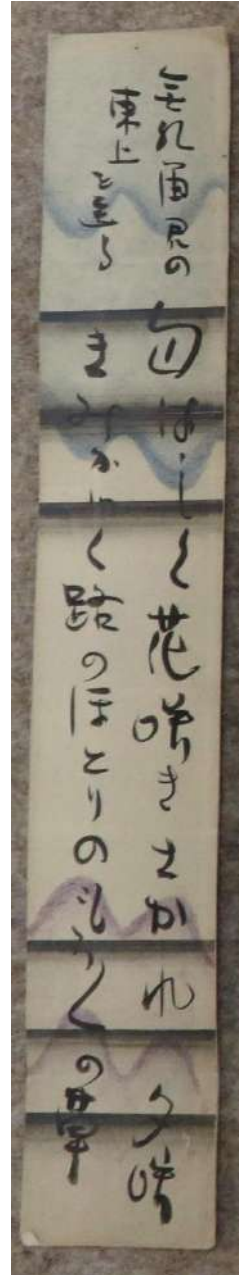
個人蔵



心していゆきたまへやかにかくに

なたれかちなる雪の岨道

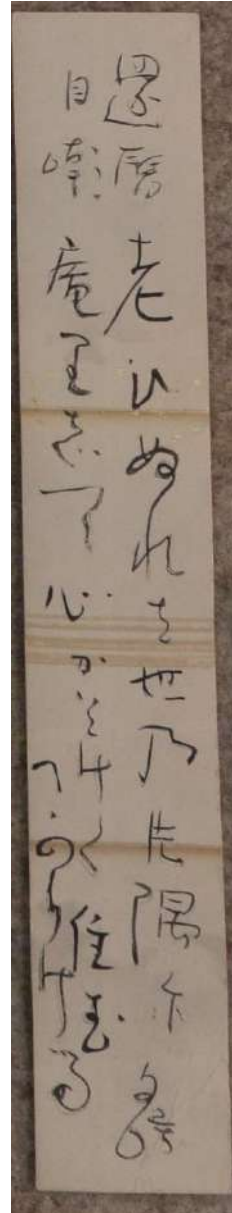
個人蔵



山下笛君の 句はしく花咲きさかれきみかゆく

東上を送る 路のほとりのもろもろの草

個人蔵



還暦 老いぬれば世の片隅に庵里して

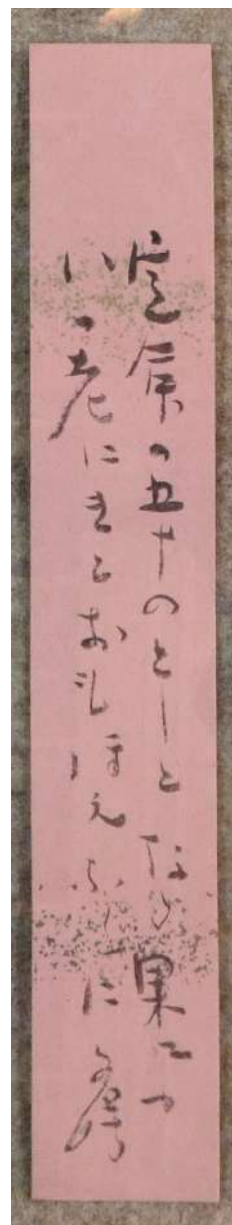
自嘲 心かそけく住むべかりける

個人蔵



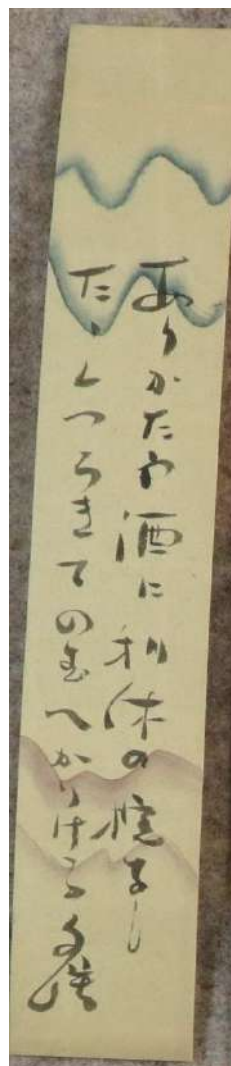
雪の反時ほの青う人も慕ひけり

個人蔵



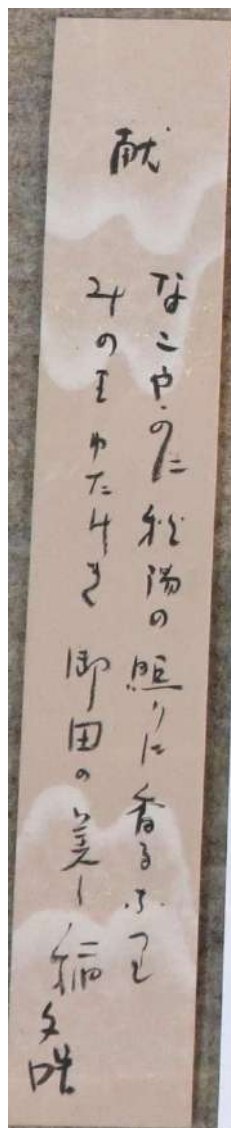
定命の五十のとしとなり果てつ
いつ老にきとおもほえなくに

個人蔵



あやかたや酒に利休の掟なし
たつくつろぎてのむべかりける

個人蔵



献
なごやかに秋陽の照りに香るなり
みのりゆたけき御田の美し稲

個人蔵

献

夜神楽の音はるはるに鳴りわたり

田の面にそよぐ風のすがしさ

個人蔵

悼

ゆく春のあとをはかなみ蝶々の

翅のいろもうつろひにつゝ

個人蔵

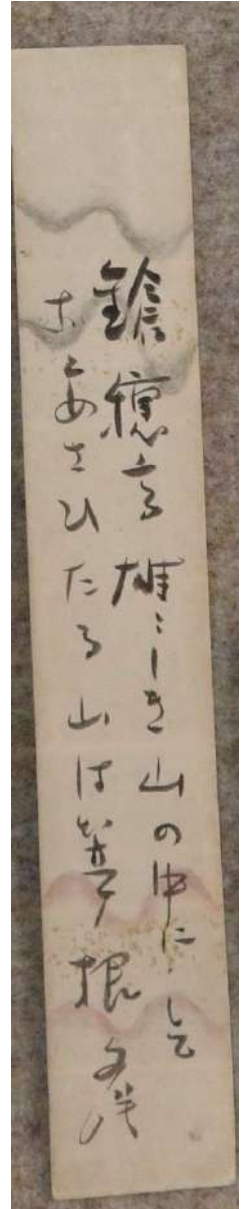
よき人の玉の腕に抱かれて

沈むもよろし春の水底

夕咲

沈むもよろし春の水底

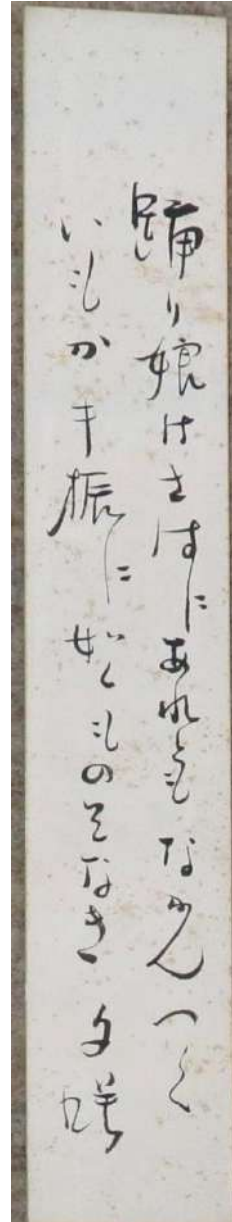
個人蔵



鎗穂高雄々しき山の中にして

おとめさひたる山は笠ヶ根

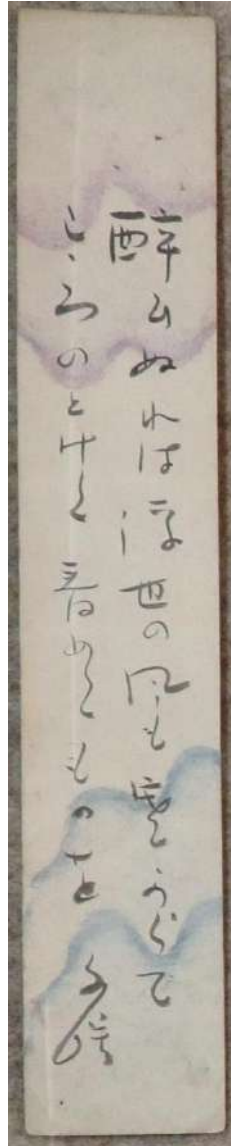
個人蔵



踊り娘はさはにあれともなかんつく

いもか手振りに如くものぞなき

個人蔵



酔いぬれば浮世の風も寒からで

こころのとけく春めくものを

個人蔵

賀

峠越え来れば酒肆あり桃の花
夕味

賀

峠越え来れば酒肆あり桃の花

個人蔵



み渡せば千々にきらめくささ浪の

浦に晴れて好き日秋かも

個人蔵

③ 春慶盆



石の上に

こころ幽けく

いく時を

あり経しものか

梅かほる

夜を

個人蔵



野茨の

花こぼれいて

雨あとの

黒ほこ道の

いよに黒志も

個人蔵



足曳の山の

かたみに

ひと株の

蘭は根こちて

家つとにせむを

個人蔵



思ふとち

柴析り

焚きて

うたけせ志

上野平も

冬寂び

にけ里

個人蔵



徴発馬の

ほほを

かるくたたき

飼主が

志めやかに

何か

言ひさとし

居里

個人蔵



あたゝ可記

日奈たの椽に

飼烏を

鳴可せ天

あそ婦人

乃ても■記

個人蔵



朝風の

靄を

透志て

みは可山

松倉山は

ほのかなる

可も

近代文学館蔵

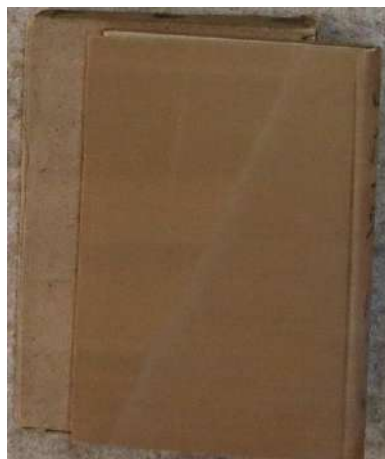
(四) 書籍・寄稿文等

① 個人出版物



春のゆめ

明四五 福田夕咲 近代文学館蔵
処女詩集



山花一束

昭一七 福田夕咲 近代文学館蔵
第一歌集



山都年中行事

昭一一 福田夕咲 近代文学館蔵
飛騨考古土俗学会誌『ひだびと』に昭
十から連載



歌集 山づと

昭一八 福田夕咲 近代文学館蔵
第二歌集



飾りものゝ話

昭一六 福田夕咲 近代文学館蔵
高山市からの委嘱を受けて刊行



福田夕咲全集

昭四四 福田夕咲全集刊行会 近代文学館蔵
夕咲の死後に刊行

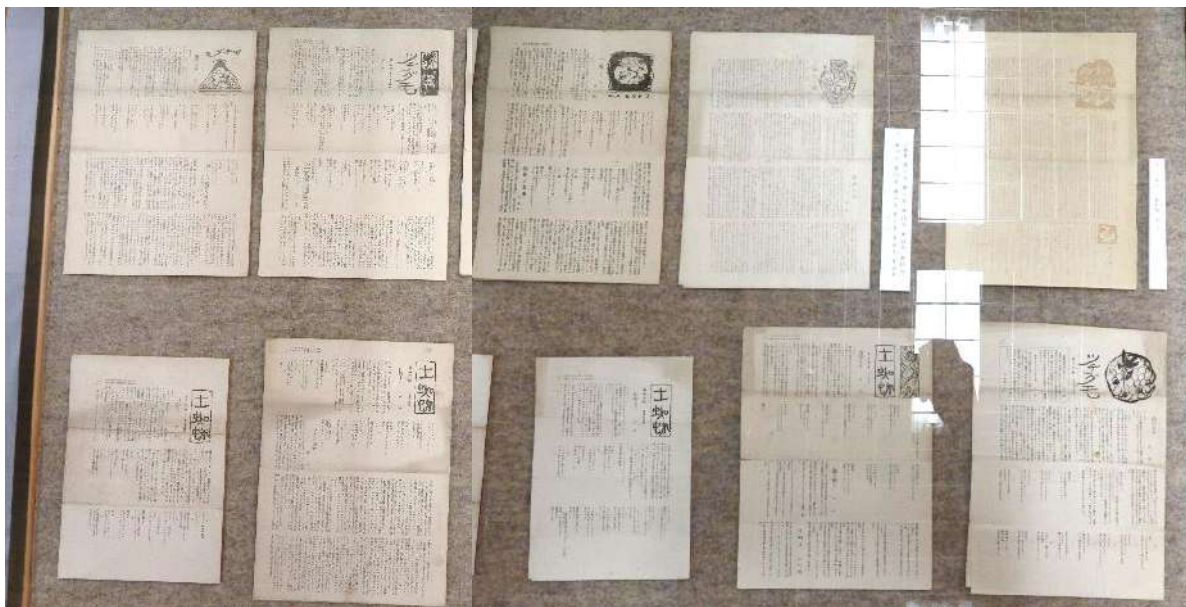
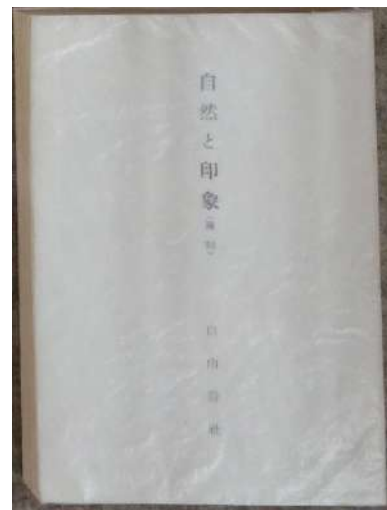
② 文芸誌



早稲田文學 明治四一年・明治四二年、明治四四年・大正二年
明二四、早稲田文学社 個人蔵
夕咲は明治四一年から参加

自然と印象（復刻）

明四一、自由詩社 個人蔵
夕咲が創刊に関わる



ツチグモ 創刊号、第2号、第7号、第10号、第11号、第12号、第13号、第14号、第15号、第18号、第19号

大三～ 福田夕咲が兄鋤雲と共に高山で創刊 近代文学館蔵



静なる饗宴 No. 1

大二三 山百合詩社同人誌

近代文学館蔵



鉦削佛・創刊号

昭八一刀三禮社 近代文学館蔵

吉村比呂詩・山下笛朗らと創刊



山脈詩派 1、11 夕咲五十回
誕辰記念 昭一〇、27

山脈詩派社 個人蔵

飛驒短歌 福田夕咲追悼号

昭二三 近代文学館蔵

昭二一に富田令禾・大桢間霽江・鎌手

白映らと創刊



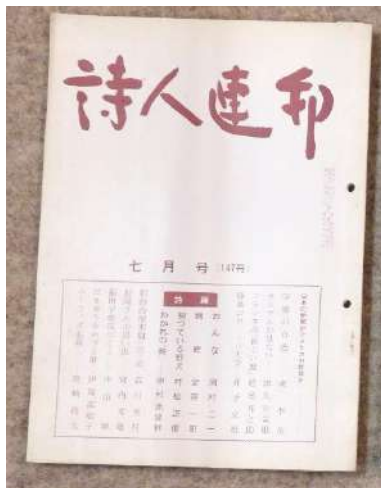
③ 寄稿



神秘谿谷 双六谷探検記
(中学世界) 福田夕咲寄稿(コピー) 個人蔵



観光 第六卷第四号・第五号
名古屋旅行協会 個人蔵



詩人連邦 七月号 (一四七号)
詩人連邦研究会版 個人蔵

④
掲載

東濃文学 92 記念特別号

東濃文学編集委員会 個人蔵



はあとくらぶ抄史

※ハートクラブは血縁者の親睦会

長瀬武宜他



中部日本詩集

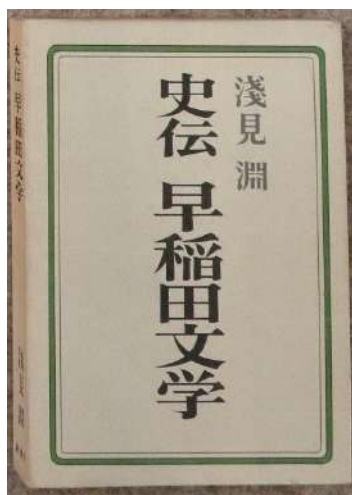
(紀元二千六百年記念)

詩と民謡社 個人蔵



史伝 早稲田文学

浅見淵

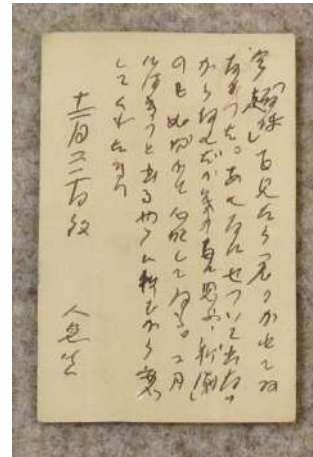


近代文学研究叢書

昭和女子大学近代文化研究所 個人蔵

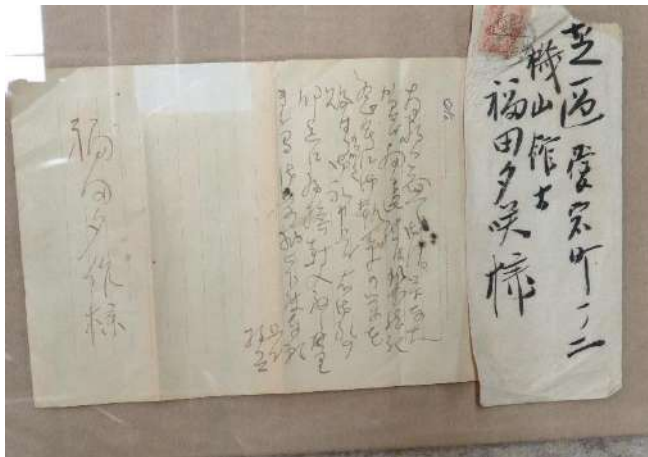


(五) その他



はがき 福田夕咲あて

明四三 人見東明 近代文学館蔵



手紙

福田夕咲あて

近代文学館蔵



落款・印譜

近代文学館蔵

二、
若山 牧水

わかやま
ぼくすい

明治十八年（一八八五）八月二十四日～昭和三年（一九二八）九月十七日

歌人。本名繁。宮崎県東臼杵郡東郷村（現日向市）の医師の長男として生まれる。

明治三十二年（一八九九）宮崎県立延岡中学校に入学。短歌と俳句を始める。十八歳のとき、号を牧水とする。明治四十一年（一九〇八）早稲田大学英文科卒、七月に処女歌集『海の声』出版。明治四十四年（一九一一）創作社を興して詩歌雑誌「創作」を主宰する。大正十五年（一九二六）詩歌総合雑誌「詩歌時代」を創刊。旅を愛し、旅にあって各所で歌を詠み、日本各地に歌碑がある。大の酒好きで、一日一升の酒を吞んでいたといわれる。



若山牧水肖像

沼津市若山牧水記念館蔵

(一) 写真



早稲田の三水（明治三十七年十月）

※三水とは、牧水・北原射水（後の白秋）、中林
蘇水のこと
沼津市若山牧水記念館蔵



若山牧水 旅姿

『幾山河』より



野口の築「焼いて食べる」

岐阜県美術館蔵

「若山牧水」解説と短歌

近代文学館展示

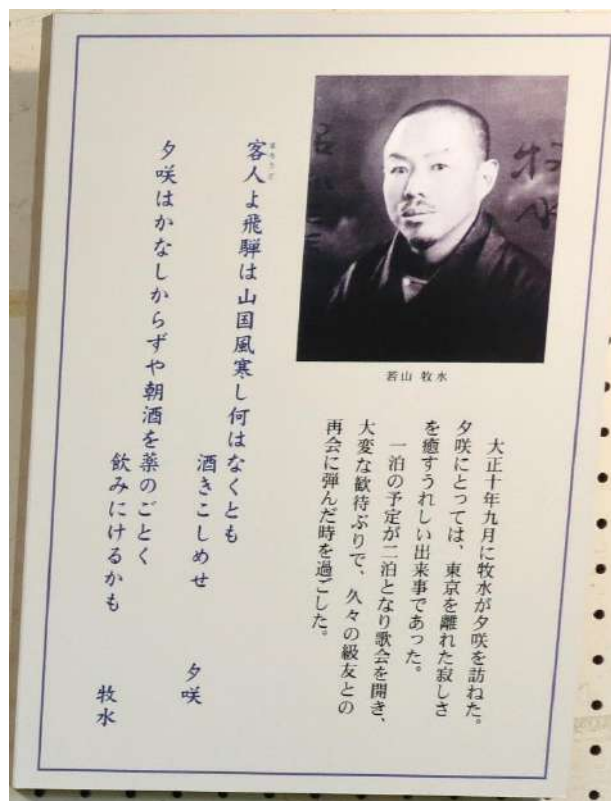
大正十年九月に牧水が夕咲を訪ねた。夕咲にとっては、東京を離れた寂しさを癒す嬉しい出来事であった。

一泊の予定が二泊となり歌会を開き、大変な歓待ぶり、久々の親友との再会に弾んだ時を過ごした。

まろっと

客人よ飛騨は山国風寒し何はなくとも酒きこしめせ 夕咲

夕咲はかなしからずや朝酒を薬のごとく飲みにけるかも 牧水



若山牧水書斎にて（大正十二年）

沼津市若山牧水記念館蔵

ゆきくれて
ひと夜を宿る
ひだのくにの
古川の町に
時雨ふるなり
若山牧水歌碑（古川町）



のぼり来て平湯峠ゆ見はるかす
ひだの平に雲こごりたり
若山牧水歌碑（平湯峠）



若山牧水之墓



（沼津市）

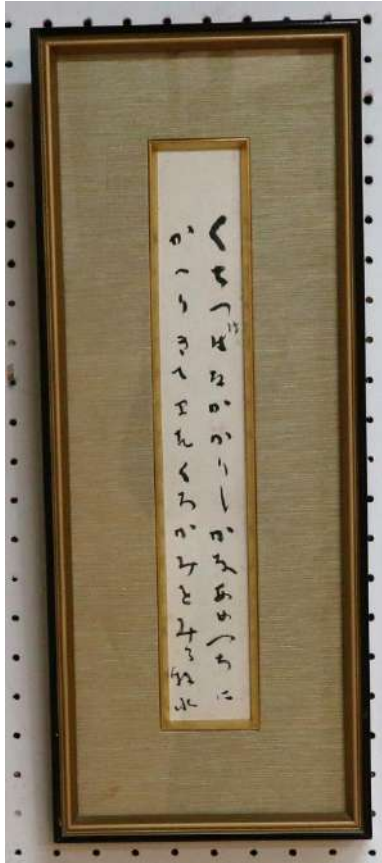


(二) 短歌・俳句



たぽたと樽に満ちたる酒は鳴る
さびしきこゝろうちつれて鳴る

個人蔵



くちつけはなかりしかなあめつちに
かへりきてまたくろかみをみる

個人蔵

峰の風きようは沢辺に落ちて吹く

広葉がくれの葛の白花

個人蔵

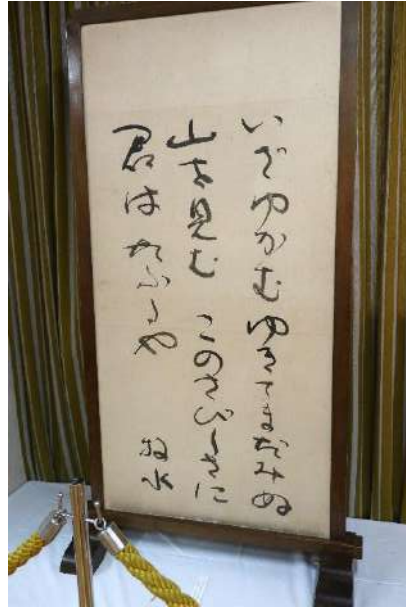


幾山川こえさりゆかばさびしさの

はてなむ國ぞけふも旅ゆく

個人蔵

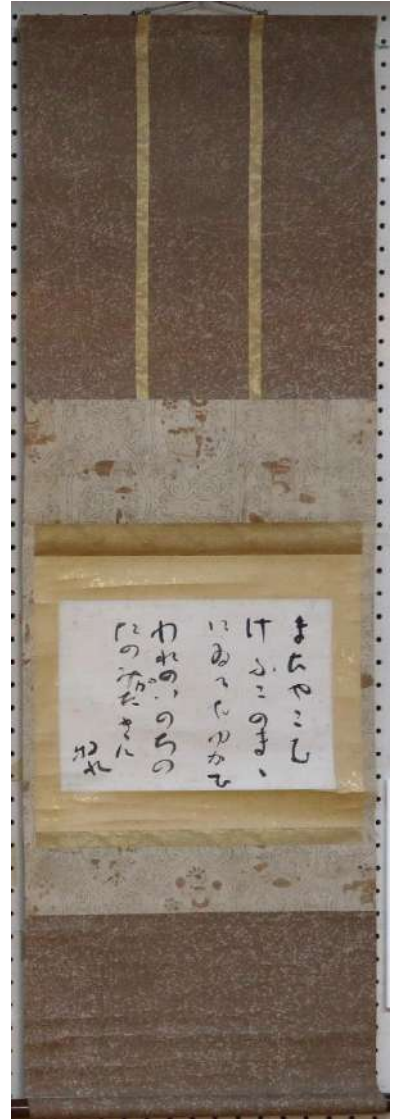




いざゆかむゆきてまだみぬ山を見む

このさびしさに君はたふるや

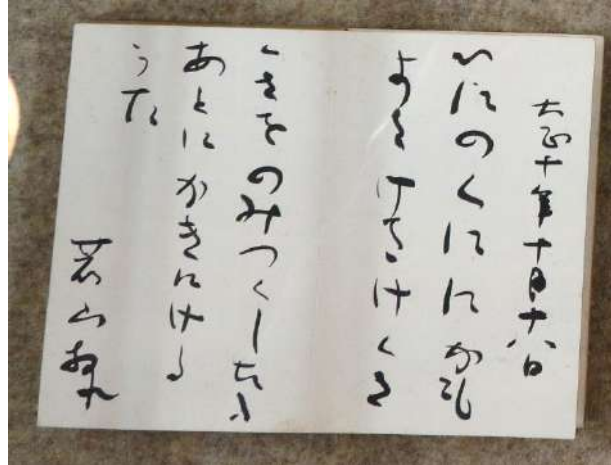
個人蔵



またやこむけふこのまゝにゐてやゆかむ

われのいのちのたのみがたきに 個人蔵

帳の同一ページの裏表



大正十年十月十八日
ひとのくににかも
よき御けさけくさ
くさをのみつくしたる
あとにかきける
うた

若山牧水



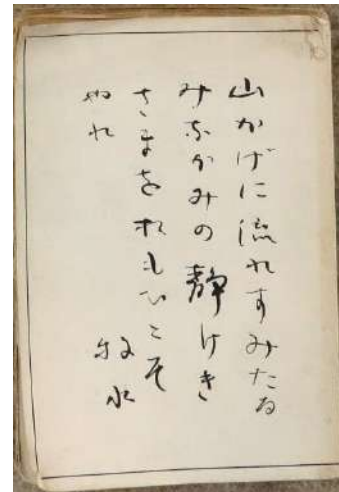
大正十一年八月精霊送り夜

遊仙

(三) 雑誌・書籍

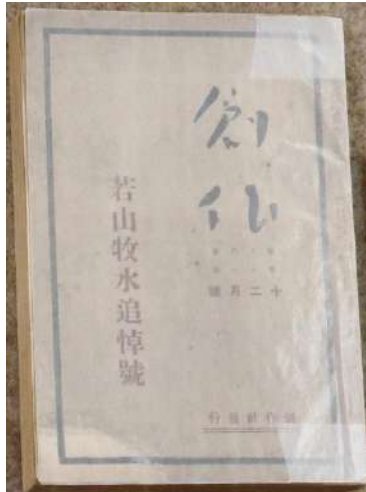
みなかみ紀行

若山牧水



創作 (若山牧水追悼号)

創作社



ホトトギス

四冊

ホトトギス発行所

三、北原 白秋
きたはら はくしゅう

日本の詩人、童謡作家、歌人。本名は北原 隆吉。熊本県玉名郡関外目村（現・南関町）生まれ。県立伝習館中学を経て早稲田大学へ進む。

詩、童謡、短歌以外にも、新民謡（「松島音頭」・「ちやつきり節」等）の分野でも傑作を残している。生涯に数多くの詩歌を残し、今なお歌い継がれる童謡を数多く発表し、活躍した時代は「白露時代」と呼ばれ、三木露風と並んで評される、近代の日本を代表する詩人である。



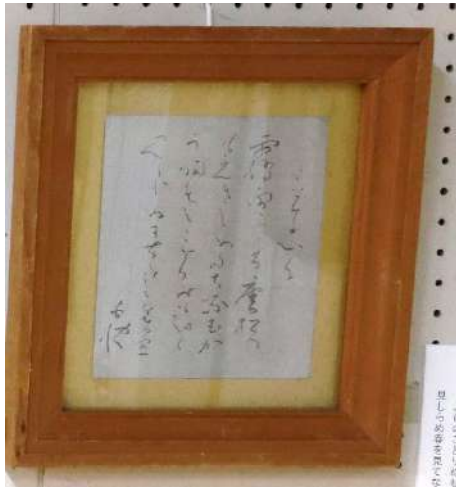
昭和七年十月に北原白秋が夕咲を訪ねた。

白秋は夕咲の案内で城山に登り、夜は料亭で飲み、歓待した。旧友の訪問に喜ぶ夕咲の姿が、没後寄せられた弔文の中に述べられている。

「その晩白秋が、飛驒の民謡にすっかり打ち込んで、夕咲を相手に嘆称してはノートにとつていた姿と、郷土民謡を自慢しつつ、如何にも嬉しげに、友人にノートせしめてゐた夕咲の面影がいまも私の眼に生きてゐる」

（同行者…吉植庄亮・『飛驒短歌』通巻十九号より）

昭和十年十月十七日 長瀬旅館にて
前列左から白秋・夕咲・吉植庄亮

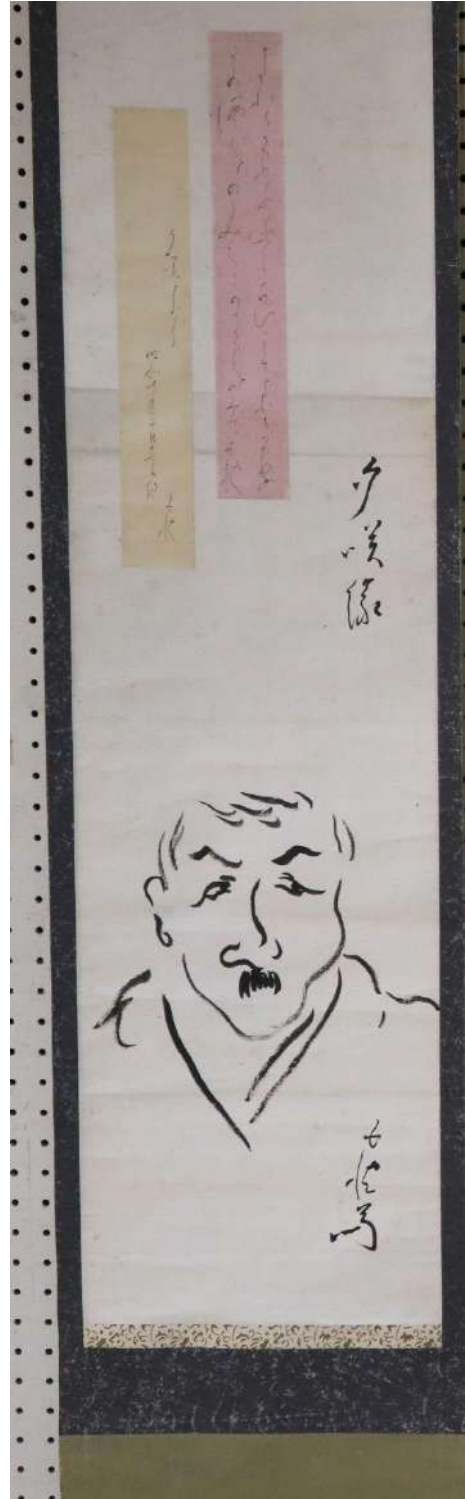
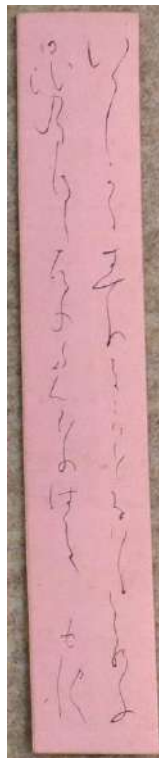


よかりけり遂にあいみてよかりけり
この酒をのみてこのさけをのみて
夕咲像 昭和十年十月十七日

ことりのひな
霧雨かかる唐松の
もえきのめたち啄むか
うぶけのことりねも細く
見しらめ春を見てなけり

白秋

いつしかに春のなごりとなりけり
昆布ほしはのたんぽぽのはな 白秋



四、吉植 庄亮

よしうえ しょうりょう

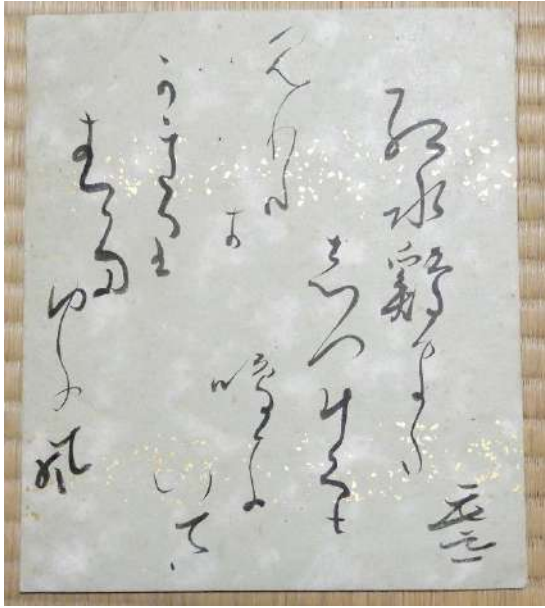
歌人、政治家。

千葉県印旛郡（現・印西市）の農家に、父庄一郎、母とくの長男として生まれる。開成中学校、第一高等学校を経て東京帝国大学法科経済学科を大正五年（一九一六）に卒業。

開成中学校在学中に『明星』や『新声』といった文芸誌を知り、作歌を始める。金子薫園に師事。第一高等学校時代には、谷崎潤一郎や和辻哲郎と交流を持った。初の短歌集『寂光』が賞賛を集め、庄亮は歌壇に認められ、北原白秋や古泉千樫ら当時の第一線の歌人たちと交流を深めた。

昭和十一年（一九三六）、衆議院選挙に千葉県第二区から出馬し当選。昭和二十三年（一九四八）に公職追放となる。没後、正五位勲三等瑞宝章が追贈された。

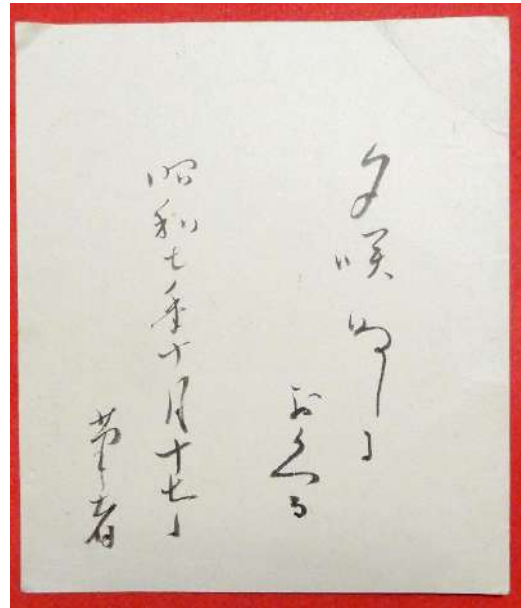
明治十七年（一八八四）四月三日～昭和三十三年（一九五八）十二月七日



紅水鶏しつけくも鳴きいでて
見わたすかぎり はるゆき

夕咲ぬしにおくる

昭和七年十月十七日



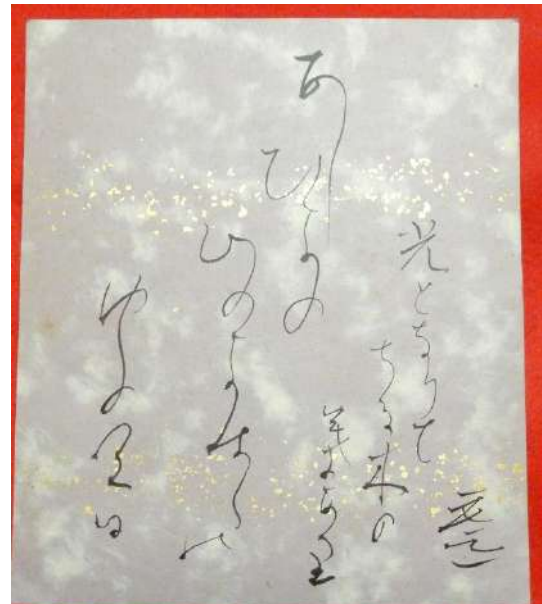
あしひきの

山のきはるの

やきふ里は

光となりて

ちる木の葉あり



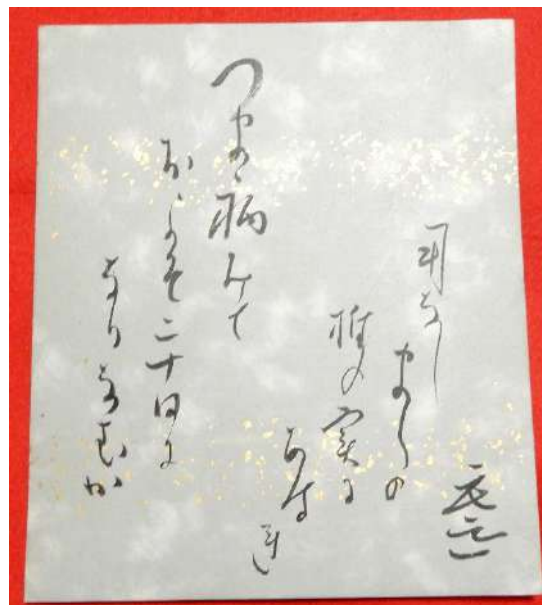
つま病みて

およそ二十日に

なりなむか

用なしまゝの

椎の実にあわれ



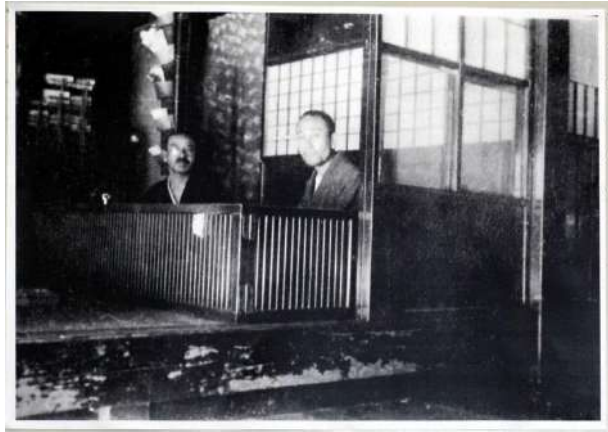
付録 第九回 近代文学館企画展

「福田夕咲展」展示抜粋

平成二十年九月十九日(金)～二十一日(日) 於 高山市図書館「煥章館」

一、
写真

福田屋帳場



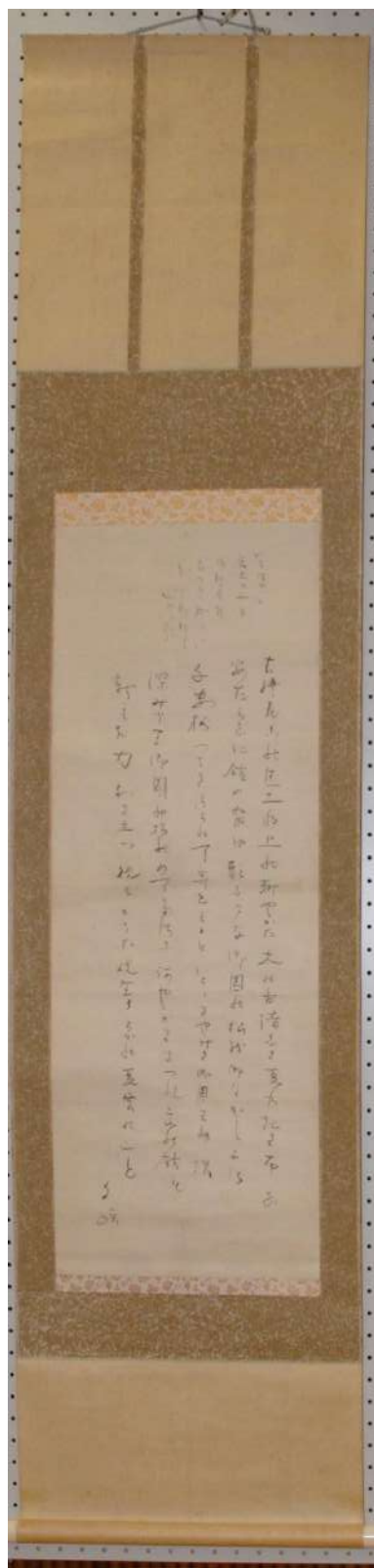
南京降
落



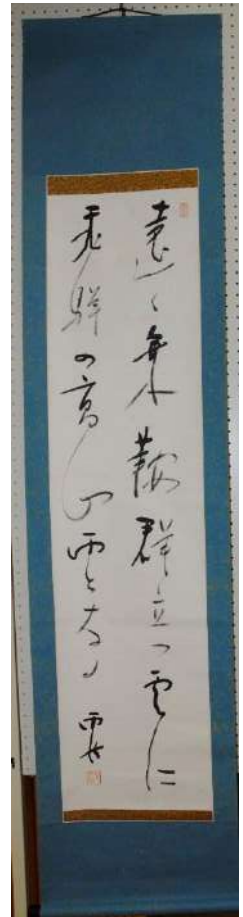
寺の
庫裏



二、
掛け軸



いちはやく焦土の上に御新居をしつらえ給いしとききて寿ほぎて詠める歌
これやこの焦土の上のあら館木の香清しき夏のおきふし
あたらしき館のまどゆ朝な夕な御園の松をあおぐかしこさ
千萬機つばさつらねてよせるもいよさやけき御園生の松
深みどり御園の松のめでたさにあやかりまつれこれのやかたを
新しき力わきたつみよかなた焼け野の原の夏雲のこと 夕咲

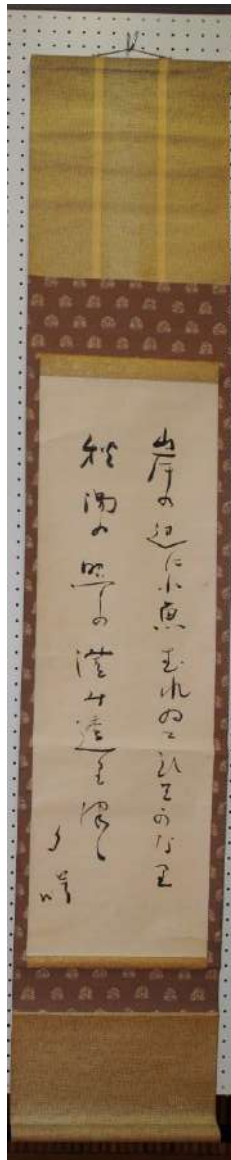


遠く乗鞍群立つ雲に

飛驒の高山雨となる 雨情

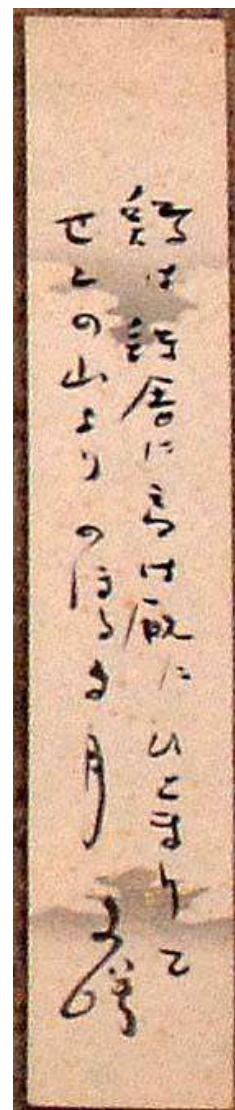


麦稈嵩に締め合せある障子 碧

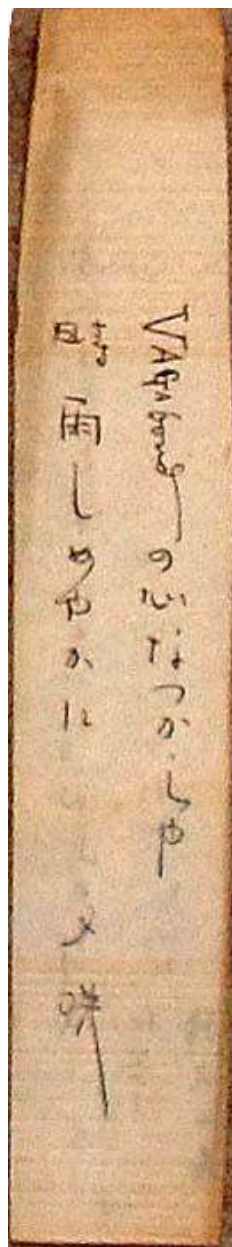


岸の辺に小魚むれゐてひそかなり
秋陽の照ふ澄み透りつゝ 夕咲

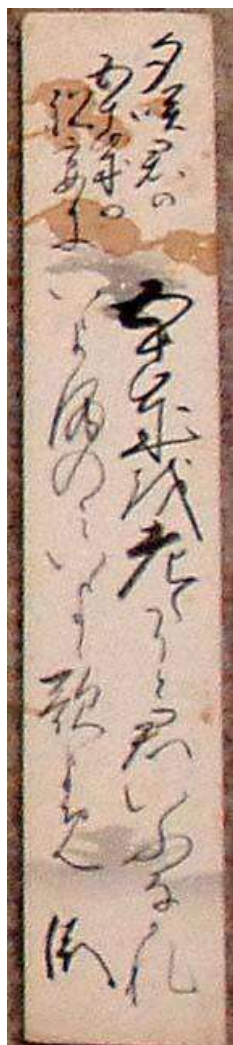
三、
短冊



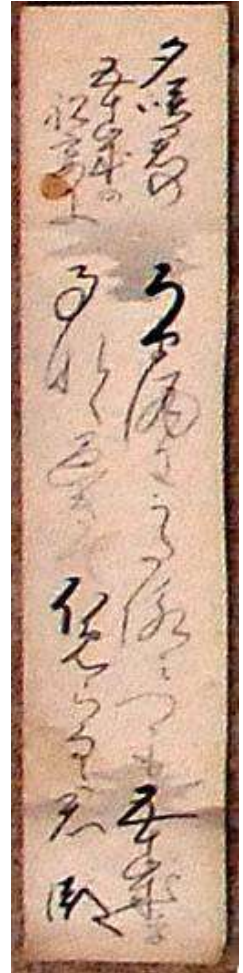
鶏は鶏舎に馬は厩にひとまりて
瀬との山よりのぼる夕月 夕咲



VAGABOND の心なつかしや
時雨しめやかに 夕咲



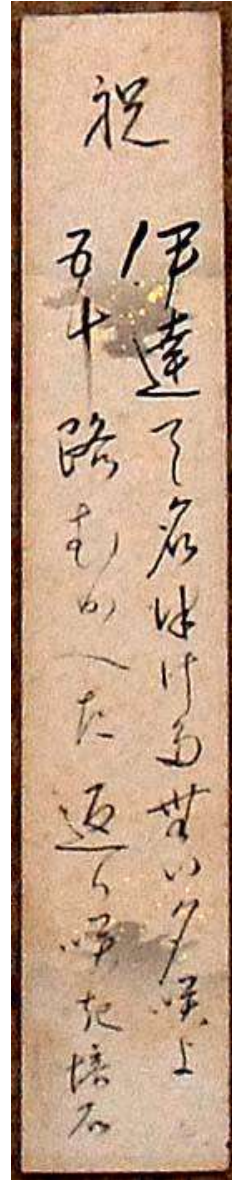
夕咲君の 五十歳を老いたり君いうなかれ
五十才の祝宴に いよよ酒のみいよよ歌よめ 潮



夕咲君の

うま酒にうた詠みつつも五十歳

五十才の祝宴に 事なくすぎて〇めらるる君 潮



祝

伊達に名付けた無い夕咲よ

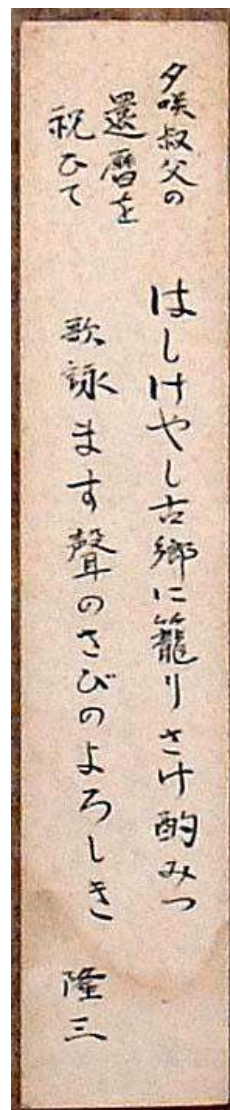
五十路むかへた返り咲き 培石



福田夕咲

宵待草かけふもさけさけ

夜毎さけ十六、九、十二

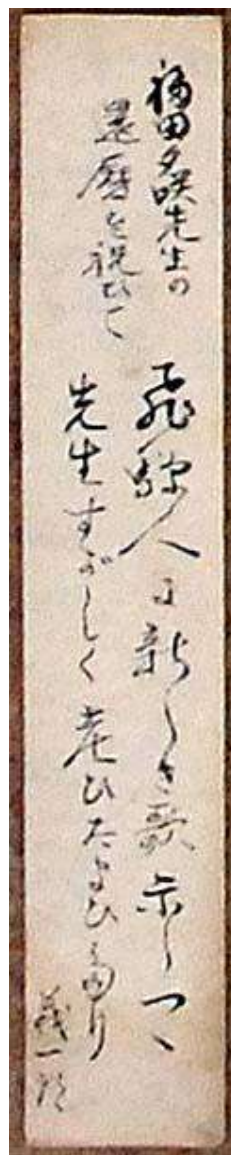


夕咲叔父の

はしけやし古郷に籠りさけ酌みつ

還暦を祝ひて

歌詠ます聲のさびのよろしき 隆三

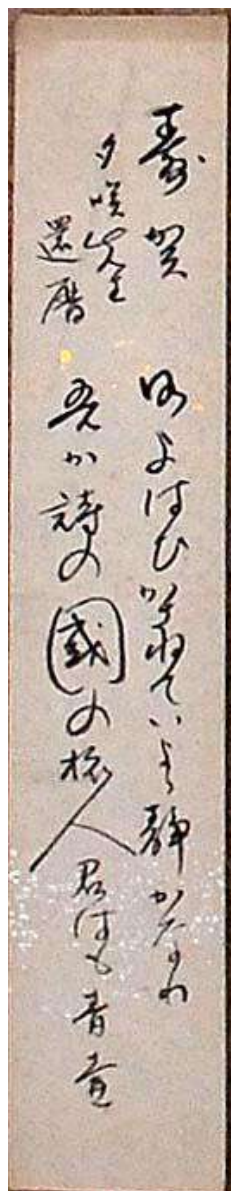


福田夕咲先生の

飛騨人に新しき歌示しつつ

還暦を祝ひて

先生すがしく老ひたまひたり 義一郎

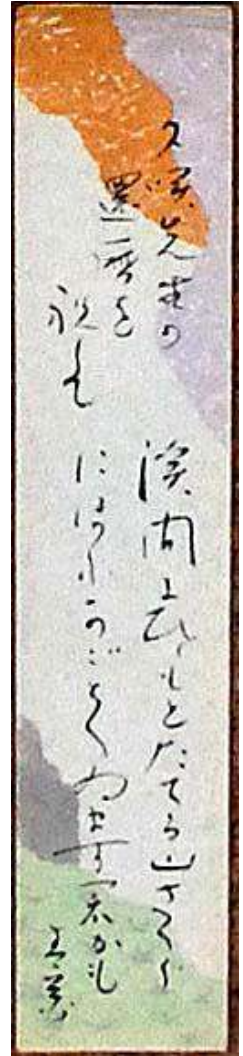


寿賀

利吾が詩の国の旅人君はも 青壺

夕咲先生還暦

御よはひかさねていよよ静かな

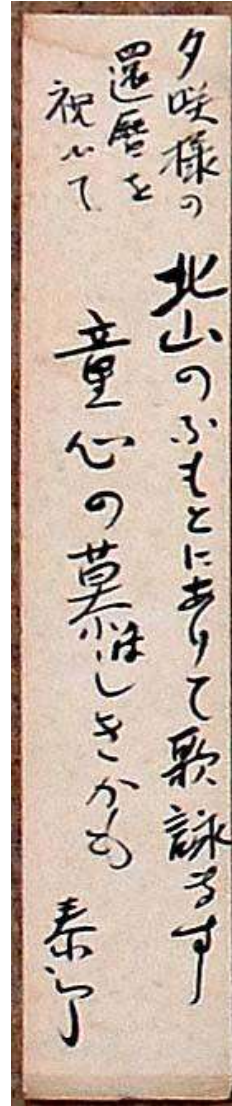


夕咲先生の

溪間にひととたたてる山さくら

還暦を祝して

にほうがごとくぬます君かも 青花

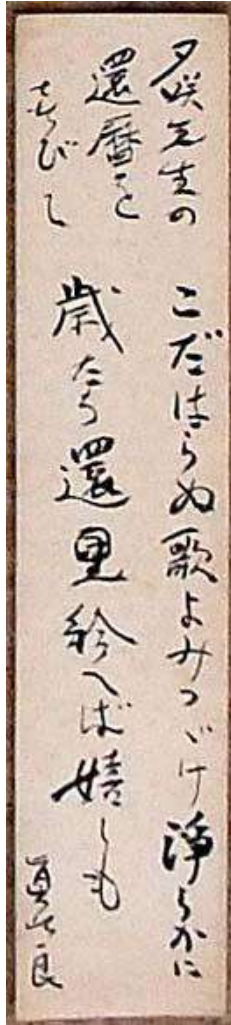


夕咲様の

北山のふもとにありて歌詠ます

還暦を祝いて

童心の慕はしきかも 泰郎

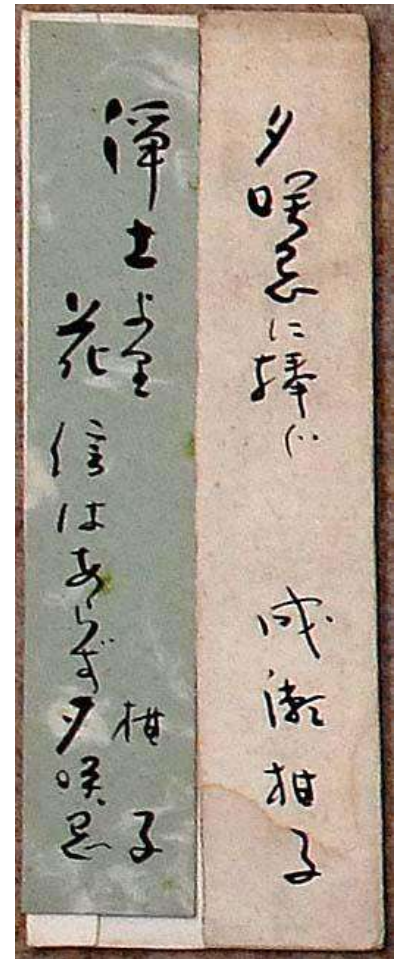


夕咲先生の

こだはらぬ歌よみつづけ浄らかに

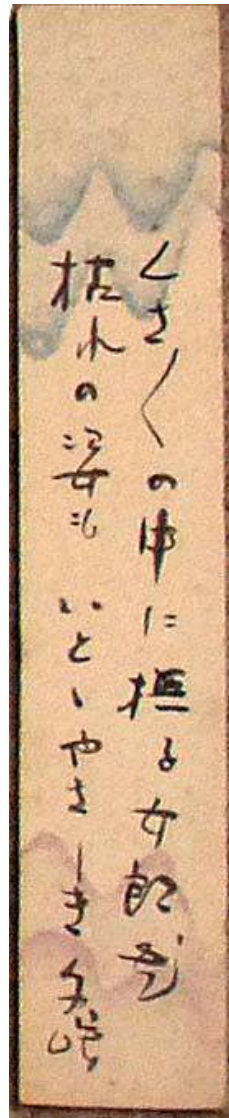
還暦を喜びて

歳たち還里給へば嬉しも 真比良



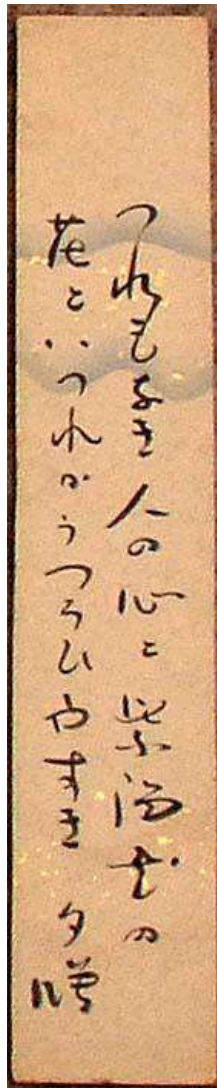
夕咲忌に捧ぐ 成瀬柑子

浄土より花信はあらず夕咲忌 柑子



くさくさの中に撫子女郎花

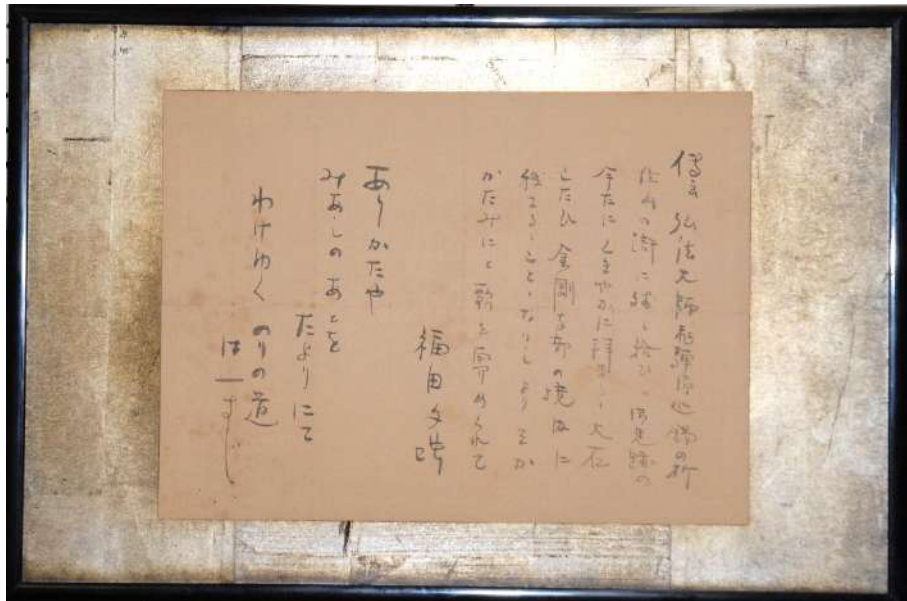
枯れの姿もいとやさしき 夕咲



つれもなき人の心と紫陽花の

花といつれかうつろひやすき 夕咲

四、
扁額



五、寄稿・発行・記事

女子文学

福島宗治 楽園社



新文藝

松崎善太郎 新文藝社



青杉

石川一重 青杉社



悲陀

山田鎌太郎 悲陀詩社



文藝雑誌 新人文学

恩田幸夫 新人文学社



裸形

鎌手白映
裸形詩社



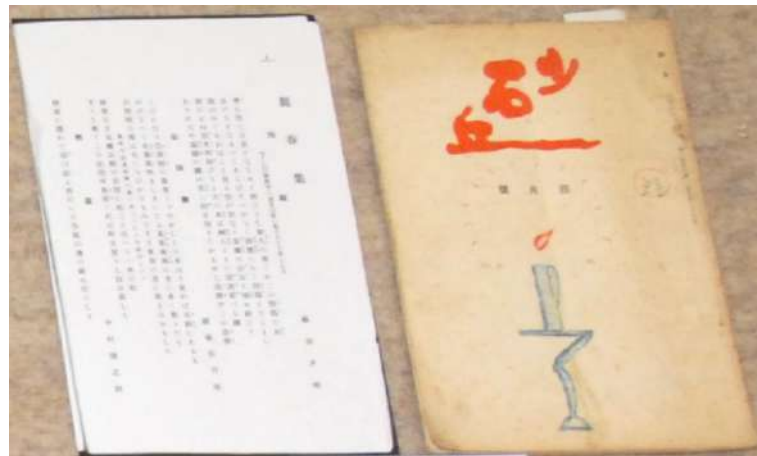
岐阜民謡

白木楓葉
岐阜民謡社



砂丘

西垣善三郎
砂丘社



牧笛

並木秋人
牧笛発行所



おもかげ

相馬昌治
野を歩む會



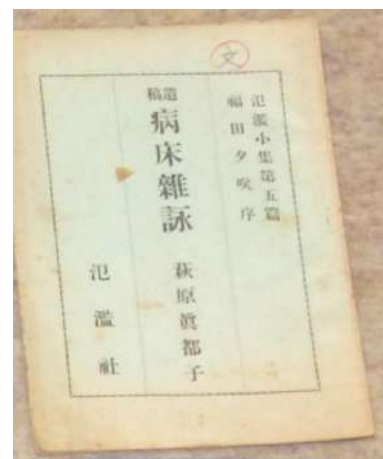
飛騨公論

前田光次郎
飛騨通信社



病床雑詠

萩原真都子
氾濫社



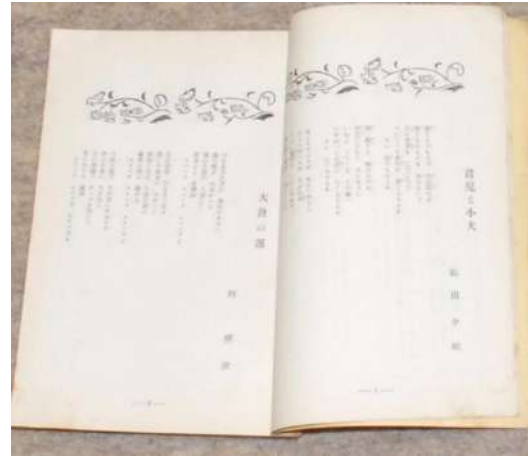
詩と民謡

中山輝 詩と民謡社



筑紫民謡

藤本種彦 筑紫民謡社



アカシヤ

古賀進 アカシヤ発行所



新日本民謡

大關五郎 帝都書院



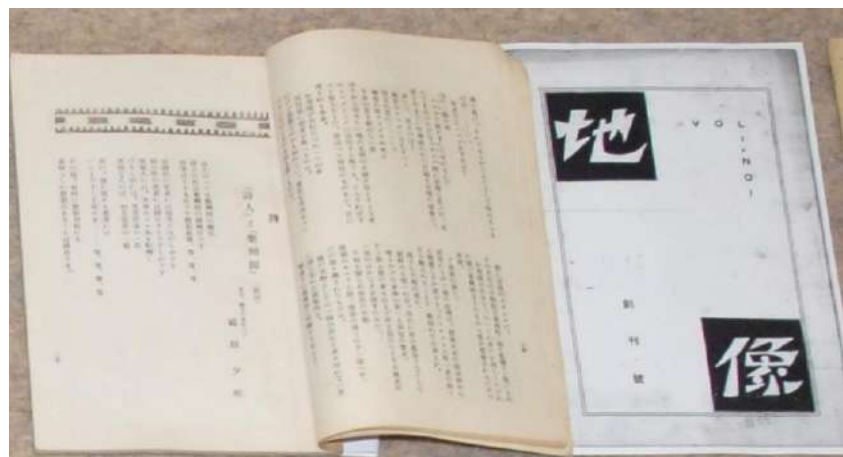
しほざゐ

大河内茂人 しほざゐ社



地像 創刊号

地像社



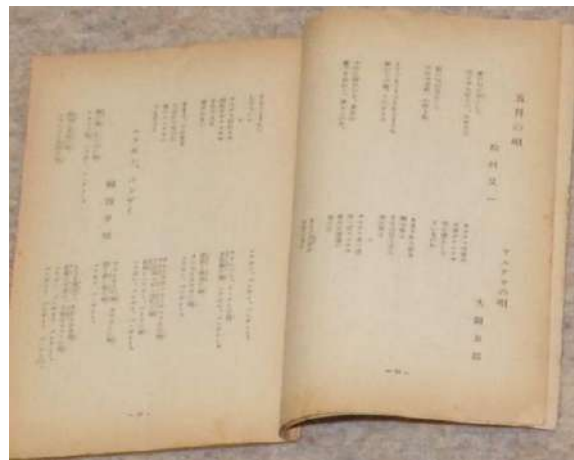
民謡詩街

石田隆 民謡詩街社



文藝

小林善八 文藝社



文藝サロン

金兒農夫雄 素人社



みのり

近藤桂一 岐阜県穀物検査
所内岐阜県穀物改良協會



旅の友

千葉豊
中部旅行協會



新興文藝

山田茂樹
新興文藝協會



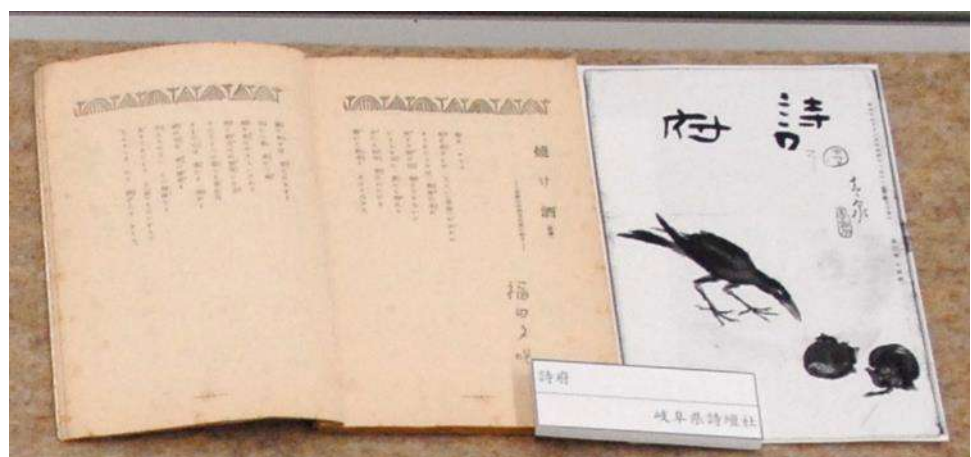
詩魔

岩間純
岐阜県詩人會



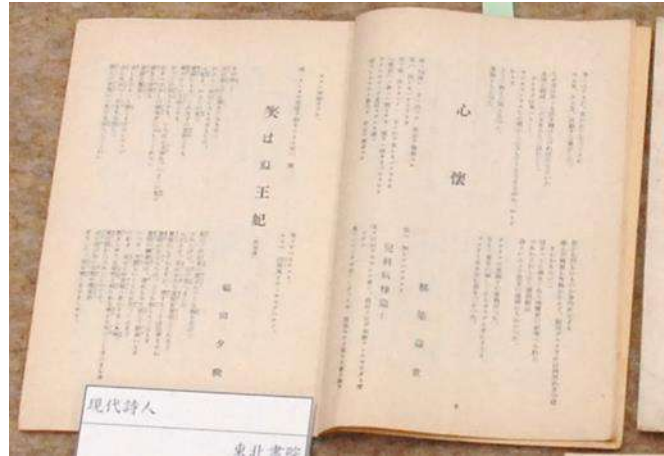
詩府

大野増太郎
岐阜県詩壇社



現代詩人

中村勝一 東北書院



荒野

安藤為康

荒野文藝社／荒野詩人社



詩人時代

吉野信夫 詩人時代社



歌謡祭

東條功 歌謡祭社



短歌巡禮

石川一重 短歌巡禮社



詩風鈴

鷺見博司 詩風鈴社



香魚

岩田繁雄 香魚詩社



短歌雑誌 町

葛谷峰三 町発行所



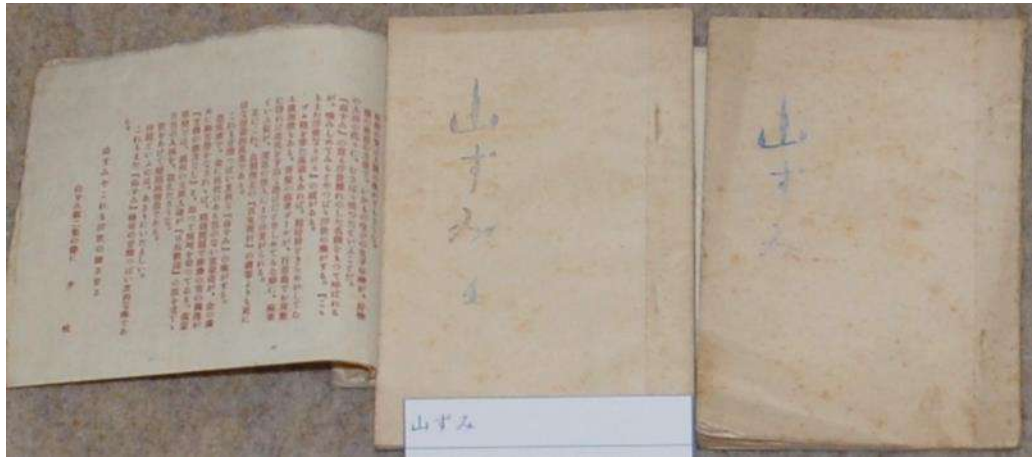
民謡原野

白木楓葉 岐阜民謡社



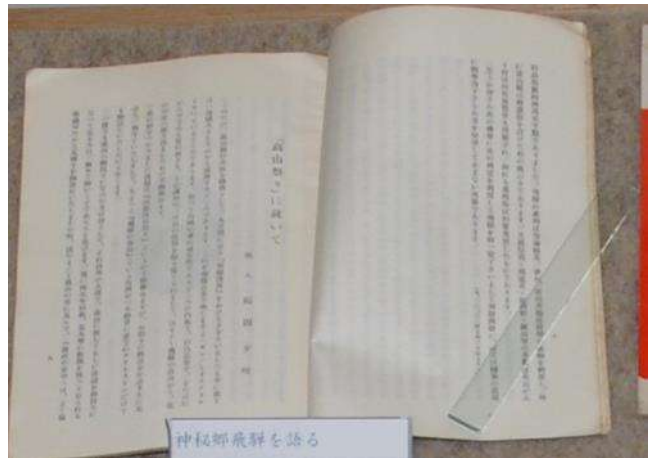
山ずみ

福田夕咲



神秘郷飛騨を語る

郷土資料調査会



青空

澤木白楊 東海作歌者協會



郷土

久保太四郎 郷土資料調査会



白鷺

西村恒道
白鷺編輯部



旅

佐藤正雄
日本旅行俱樂部



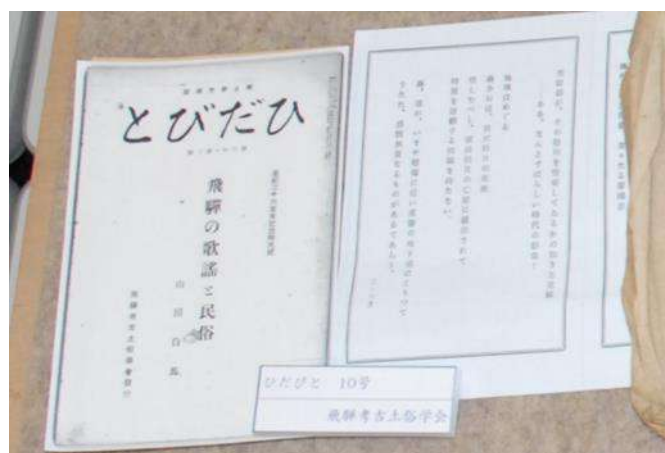
氾濫

石田漣
氾濫社



ひだびと

飛騨考古土俗学会



大和

武田全、山口豊光 大和社



文藝襍誌 山藍

矢崎正治 大衆書房



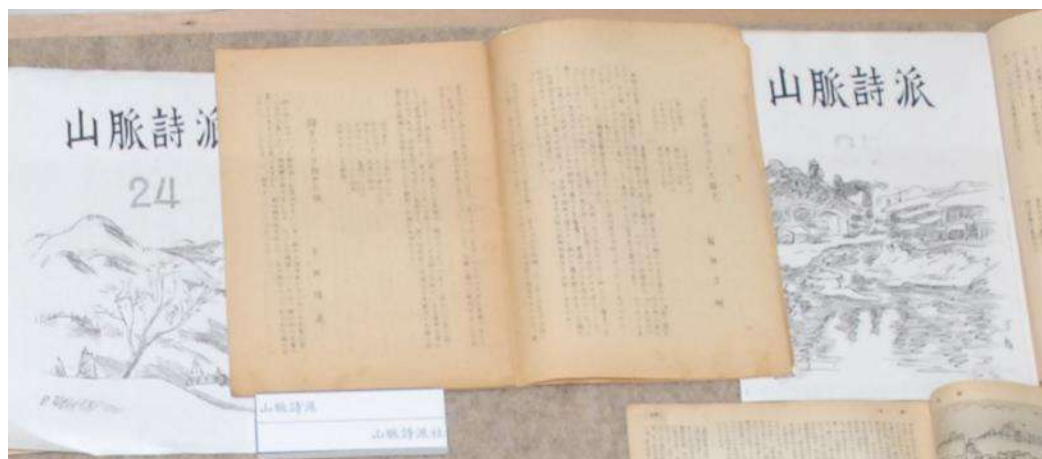
観光

松浦徳治郎 名古屋旅行協会



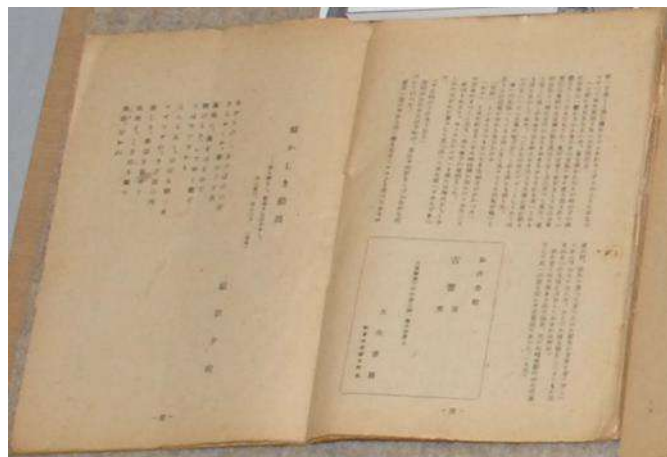
山脈詩派

和仁市太郎 山脈詩派社



蓑座

殿岡辰雄 岐阜文化聯盟



飛騨文学

福田夕咲還暦記念号

商工経済会高山支部内九月会



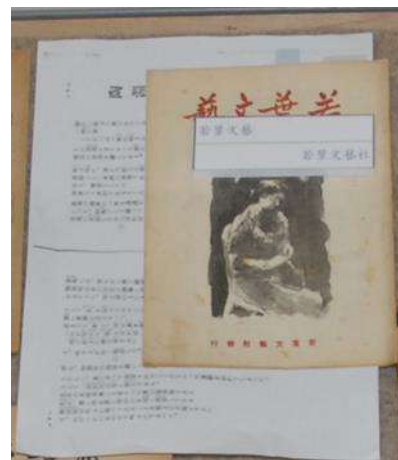
綜合文化誌 地方文化

小木曾修二 地方文化社



若葉文藝

長谷川史郎 若葉文藝社



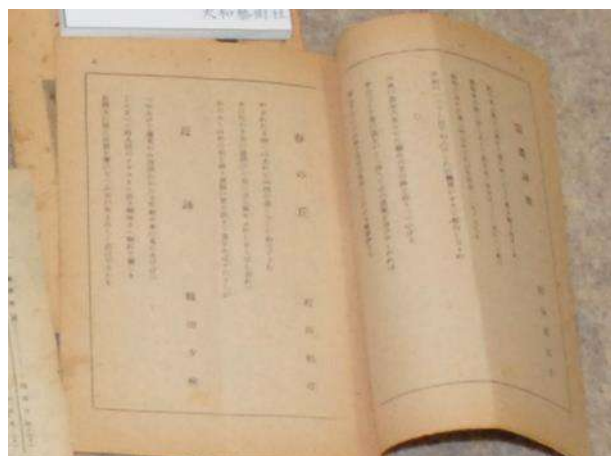
新詩人

田中聖二 新詩人社

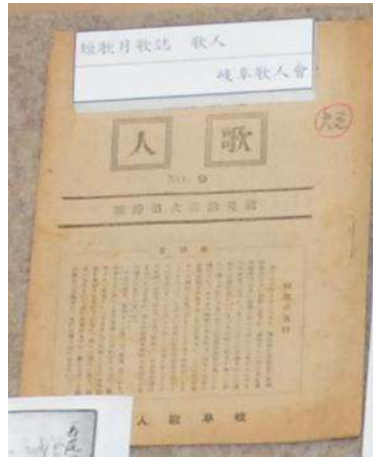


短歌文藝雑誌 大和

山口勇 大和藝術社



短歌月歌誌 歌人
田口由美、服部竹風
岐阜歌人会

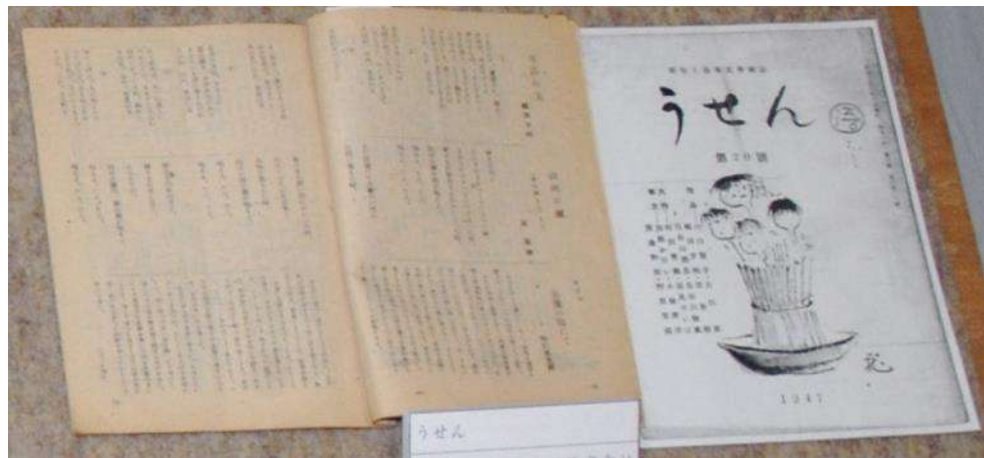


山河

中野義弘 山河同人社



うせん
鈴木博信 新日本出版株式會社



総合文化誌 新飛驒
白木久七 新飛驒社



わすれな草

福田恒子



飛驒短歌

大埜間霽江 飛驒短歌會



フォト岐阜

岐阜県広報課



茨の花詩社覚書



夕映

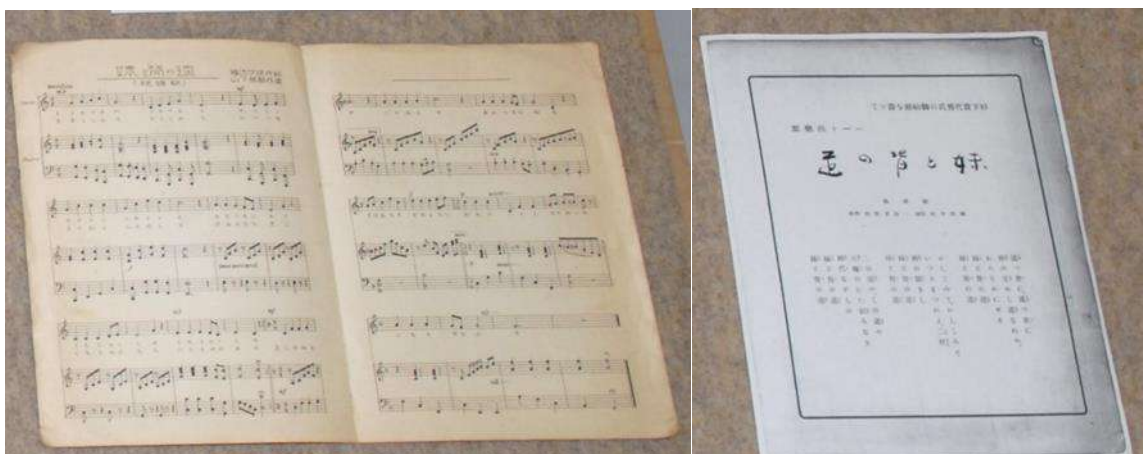


飛騨げてももの

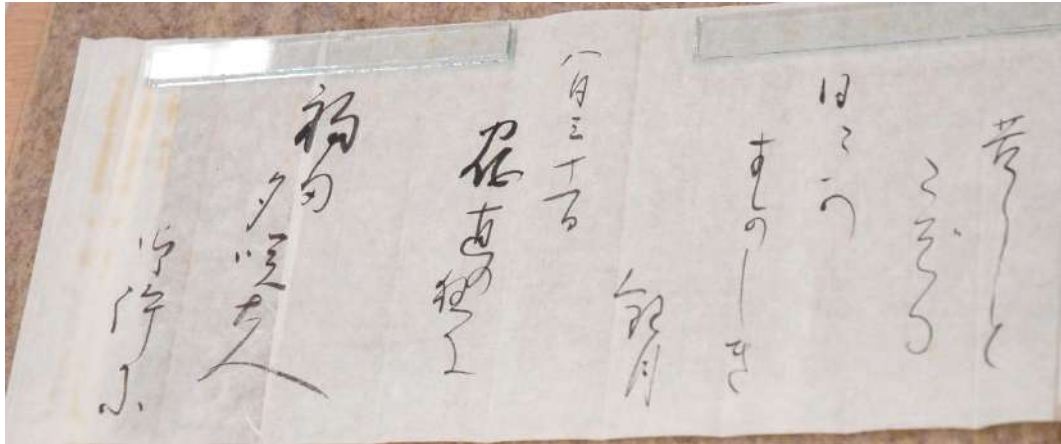


「妹と背の道」

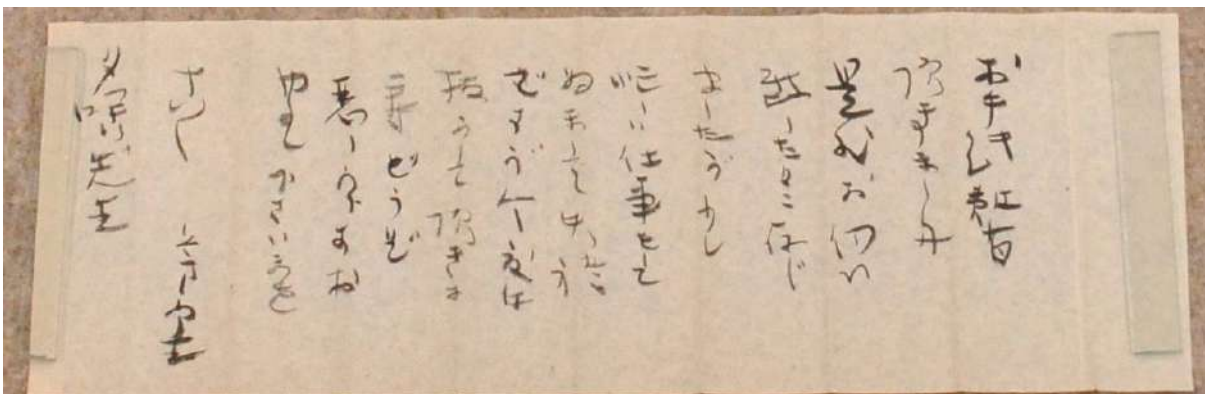
福田夕咲



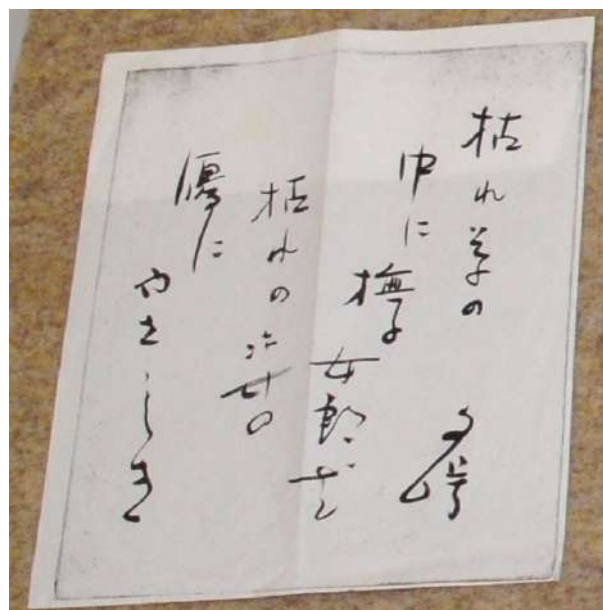
六、手紙・その他



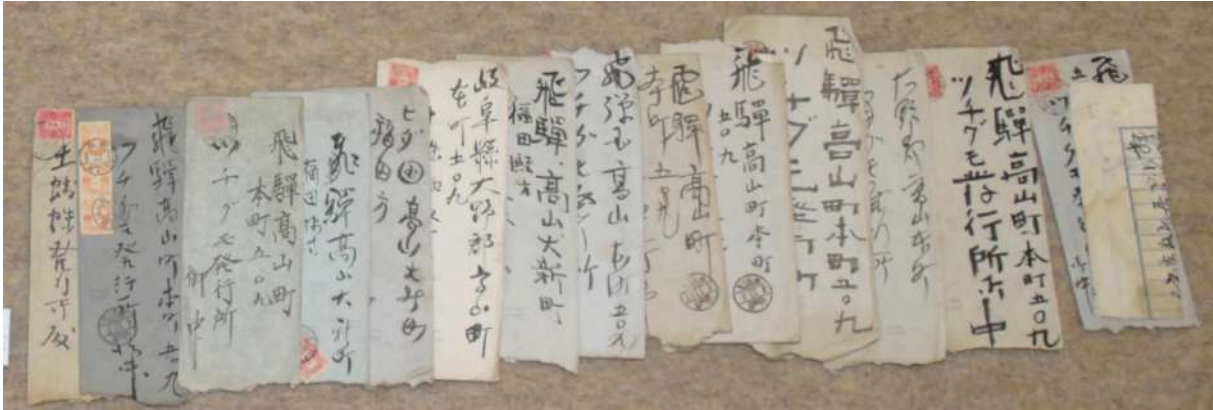
夕咲宛書状



夕咲宛書状



色紙(コピー)



ツチグモ発行所宛手紙

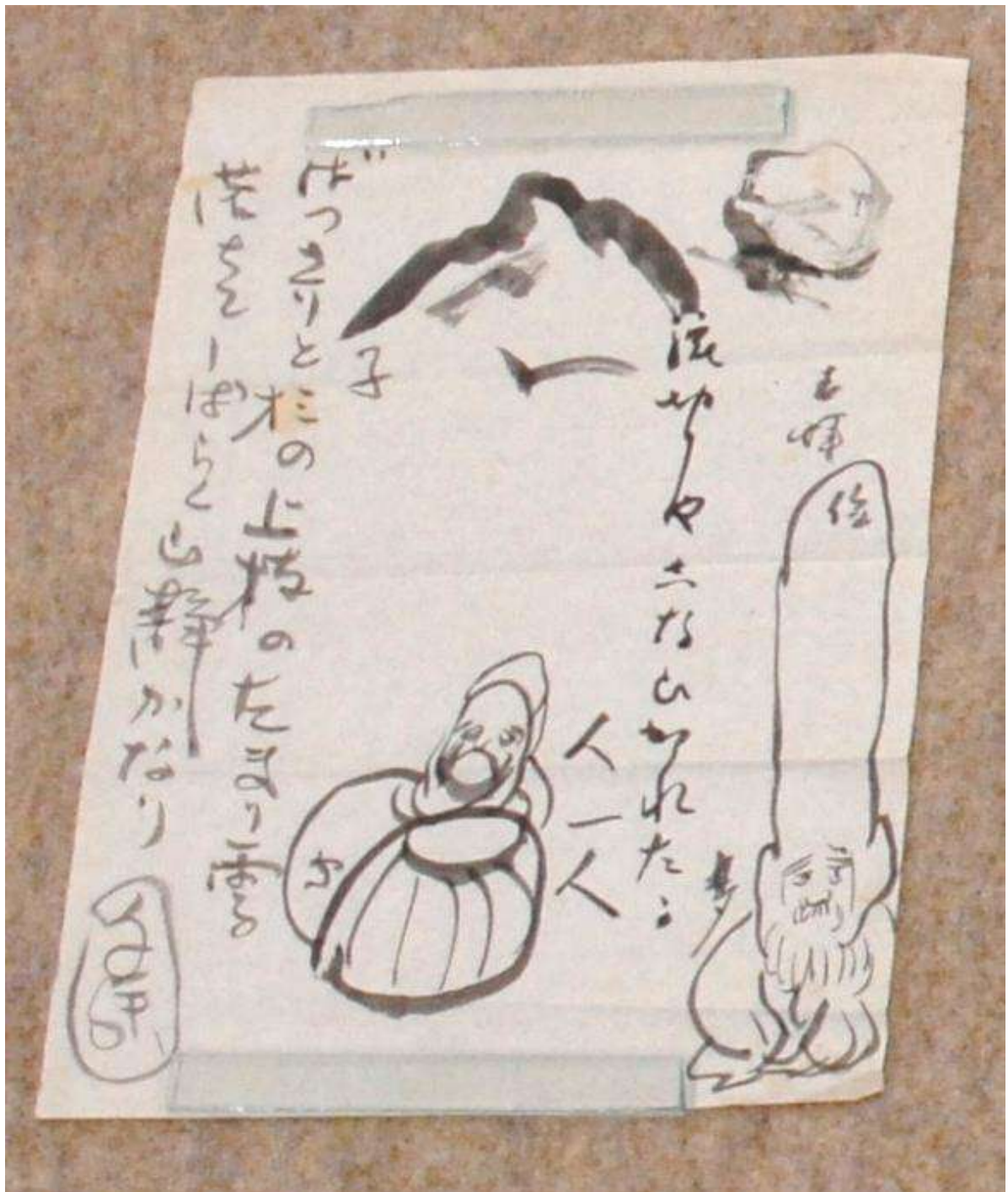


福田屋使用朱肉入れ

渋草焼 芳国舎



福田屋ト口箱印



寄せ書き

春輝、洞春、夕咲 他

高山市近代文学館調査・研究報告書

令和二年三月発行

編集 一般社団法人 高山市文化協会
印刷 飛驒印刷株式会社

高山市西之一色町三一六四七―二八

電話 (〇五七七) 三二―一一九一(代)